



あなたは誰?

108

TERASIA

TERASIA

テラジア | 隔離の時代を旅する演劇

変異の記録 2018-2025

テラジア | 隔離の時代を旅する演劇 | 変異の記録 | 2018-2025

TERASIA



TERASIA

TERASIA

テラジア | 隔離の時代を旅する演劇

変異の記録 2018-2025

はじめに

「テラジア | 隔離の時代を旅する演劇」は、2020年、新型コロナウイルス感染症の世界的流行とともに始まったアジアの協働プロジェクトです。タイ、ミャンマー、インドネシア、ベトナム、日本における多分野のアート実践家によって構成され、各地で様々な創作活動が続けられています。

発足当初、防疫のために国境を越える移動を制限されたアーティストたちは、2018年に東京で初演された『テラ』という演劇作品を、アジア各地のアーティストたちが次々に作り替え、上演し、その記録映像を始めとしたコンテンツをオンラインプラットフォーム上で共有するという青写真を描きました。「国境をまたぐ移動をせずに国際協働創作は可能か?」という問い合わせをもとに、『テラ』がアジアを旅するこのプロジェクトは、TERA × ASIAで「テラジア」と名付けられます。それから約5年にわたり活動を行う中で、各地で生み出された作品や企画は、もはや「演劇」というアート領域にも、『テラ』というタイトルにさえも縛られず、新たな場所や人との出会いによって自在に形を変え、広がっていきました。

テラジアの作品に共通する特徴は、死について、また神仏や靈魂などの不可視の存在について、詩、話芸、音楽、映像、美術、そして空間の力を借りながら問いかけることです。

- わたしたちは何者か。
- 何を信じ、どこに向かうのか。
- 生きるとは、死ぬとは？

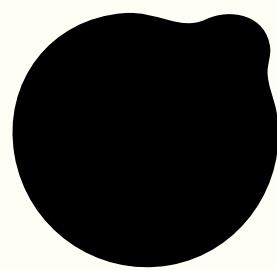
そんな普遍的な問い合わせつつ、テラジアは各地の人々と出会いながら、その土地の価値観、思想、歴史、そして現在を、作品に色濃く反映させています。

本書は、2020年から2025年にわたるテラジアの活動をとりまとめたドキュメントブックです。テラジアはどのように始まったのか、どんな経験をし、どういった変化を遂げてきたのか。テラジアは隔離の時代において、国や属性、宗教の異なる様々な人が協働し、人間の信仰や死生観を結集させた特異なプロジェクトです。アーティスト、プロデューサー、アートマネージャー、キュレーター、制作チームなど、関係者は複数の国にまたがり、その数はゆうに100人を超えています。各国でそれぞれに作品が創作されているため、その全容を把握し、プロセスを捉えられている人は誰もいません。本書は、そんなテラジアの活動履歴を概観できるように作成しました。そのため、作品創作の詳細やそれに伴う議論には踏み込んでいませんが、今後、アーティストや関係者それぞれの言葉によって語られる機会があることを期待しています。本書は、そういった議論が「隔離の時代」以降も継続されるよう、参照可能な記録としてまとめられたものです。

パンデミックの勃発から5年が経過した現在、越境や対面での活動はほぼ元通りに再開され、「隔離の時代」は過ぎ去ったように見えます。しかし、私たちが世界各地で今まさに目の当たりにしているのは、とどまるなどを知らない混乱と破壊、いまだ分断の根深い苛烈な現実です。

いかなる社会に生きていようとも、目に見えないつながりを信じ、違いを超えて人間のコアにある共通のものを一緒に探求しようとする。これがテラジアの永遠の旅のテーマです。本書を通じて、その試みの一端にでも触れていただければ幸いです。

2025年6月 テラジア | 隔離の時代を旅する演劇



TERASIA

はじめに	2
------------	---

テラジア マップ年表	6
本書に登場する主なテラジアコレクティブメンバー	8

2018-2019 テラジア前史 —コロナ以前、『テラ』から始まる—

テラジア前史	12
『テラ』チュニジアに飛ぶ	14

2020-2021 オンライン期

—新型コロナウイルス感染症の流行とテラジアの誕生—

隔離の時代のはじまり	18
タイ版『TERA たり (テラ・テラ)』の誕生	20
ベトナムチームとの出会いと、ミャンマーの情勢	22
『TERA たり (テラ・テラ)』から『テラ 京都編』へ	23
会えずとも、オンラインでつくる オンラインウィーク2021	24

2022-2023 オンサイト期 —次々と変異していくテラジア—

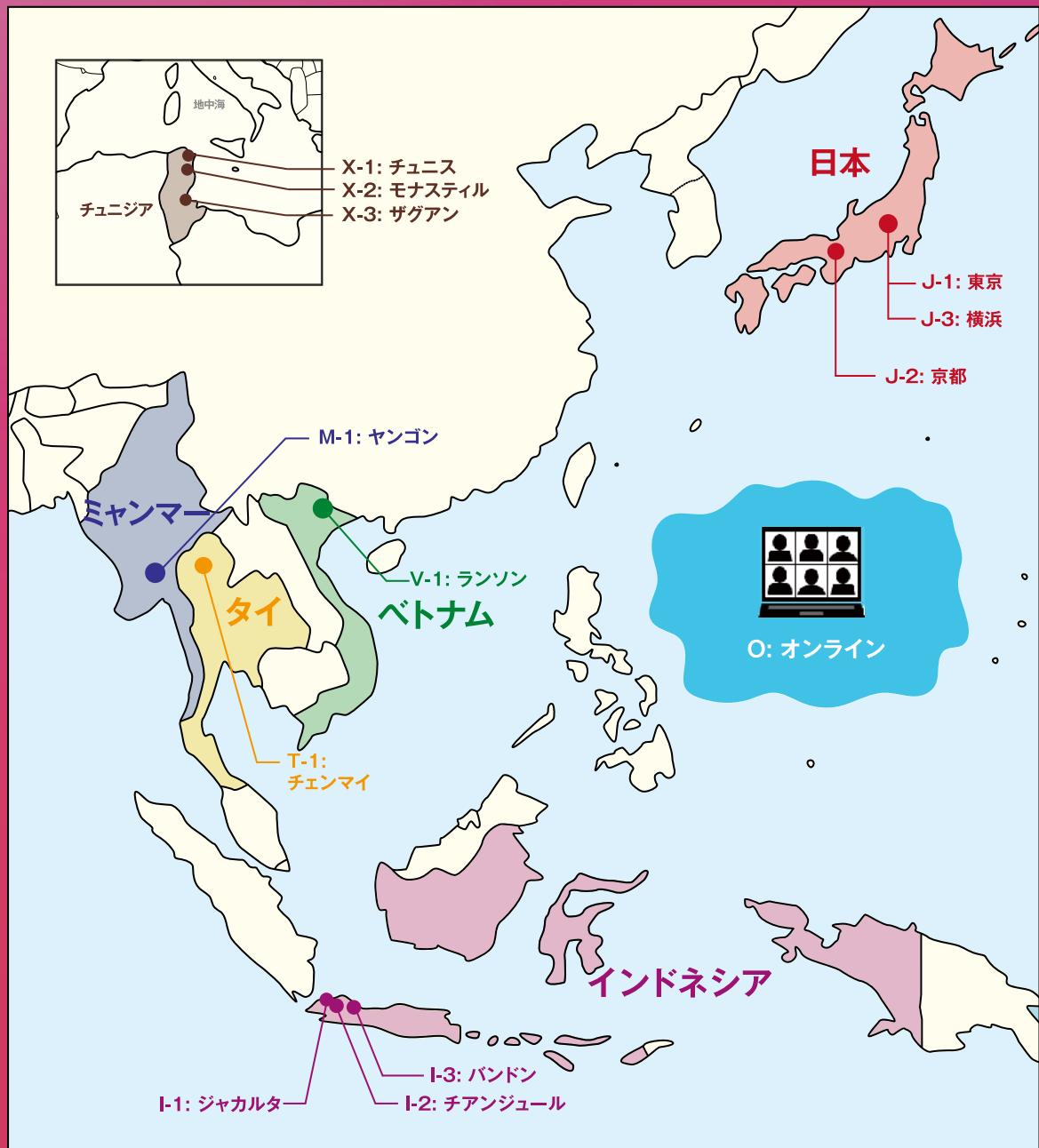
モノが移動する 展覧会『Masking/Unmasking Death』	30
初めて集う インドネシア滞在リサーチ	32
ミャンマーでの新たな創作 『လျှပ်းဘိုးရွာများ 輄』	34
記憶とルーツに潜る旅 ベトナム・ランソンリサーチ	36
各々の言葉で語られ始めるテラジア オンラインウィーク2022+オンライン	38
Sua TERASIAへ向けて 調整と選択	42

2024-2025 Sua TERASIAへ —隔離の時代の終わりとその先へ—

出会う Sua TERASIA Episode 1	46
次のSuaへ 種をまく	50
再び出会う Sua TERASIA Episode 2	52
終わりと始まりの儀式	58
おわりに	64

資料 テラジアにまつわる作品・イベント一覧 2018-2025	66
---------------------------------------	----

テラジア マップ年表



2018

11月

日本

J-1: 東京

フェスティバル/トーキョー18『テラ』公演
▶ 東京・西巣鴨 西方寺
▶ テラジアの原点となった作品の誕生

p12

2019

12月

チュニジア

**X-1: チュニス
X-2: モナスタイル
X-3: ザグアン**

『テラ』カルタゴ国際演劇祭参加
▶ チュニス、モナスタイル、ザグアン
▶ ツアー先は北アフリカ・チュニジアの3都市

p14

2020

5月

オンライン
O: オンライン p18

日本、タイ、ミャンマー、インドネシアのアーティストたちがオンラインで「テラジア | 隔離の時代を旅する演劇」を結成
新型コロナ流行初期にテラジア発足

9月

ジャカルタ
I-1: ジャカルタ p32
I-2: チアンジュール
インドネシア滞在リサーチ
▶ジャカルタ、グヌン・パダン遺跡
▶テラジアのメンバーの一部がジャカルタで初対面

10月

タイ
T-1: チエンマイ p20

『TERA タラ』公演
▶チエンマイパーラート寺院
▶わずか5ヶ月で作品が生まれ変わった

10月

ベトナム
V-1: ランソン p36

映像作品『Tangerine Womb』
制作リサーチ
▶ランソン ベトナムで創作開始、日本から渡辺が参加

10月

オンライン
O: オンライン p20

『TERA タラ』オンライン上映会
+アフタートークセッション
▶東京とチエンマイを結んでの生配信

11月

オンライン
O: オンライン p38

「テラジアオンラインウィーク2022+オンライン」開催
▶オンラインとオンラインのハイブリッド開催

- ▶M-1:ヤンゴン
11月 TERASIA Onsite 2022 in Yangon
▶ヤンゴン・Authentique Gallery
- ▶J-1: 東京
11月 TERASIA Onsite 2022 in Tokyo
▶東京・PARA
- ▶T-1:チエンマイ
11月-12月 TERASIA Onsite 2022 in Chiang Mai
▶チエンマイ・チエンマイ大学 他
- ▶I-1:ジャカルタ
1月 TERASIA Onsite 2022 in Jakarta
▶ジャカルタ・テアトル・ウタン・カユ

2021

2月

日本
J-3: 横浜 p22

国際舞台芸術見本市TPAMでプレゼンテーション
▶横浜・BankART Temporary
(ヨコハマ創造都市センター)、オンライン
▶オンラインでプレゼンを聞いたベトナムのアーティストが新加入

3月

日本
J-2: 京都 p23

『テラ 京都編』公演
▶京都・臨済宗興聖寺
▶日本2年ぶり新作 「地獄編」に生まれ変わる

11月

オンライン
O: オンライン p24

「テラジアオンラインウィーク2021」開催
▶アジア各地をつなぐ完全オンラインのミニフェス

2022

5月

日本
J-1: 東京 p30

展覧会「Masking/Unmasking Death
死をマスクする／仮面を剥がす」
▶東京・上野 東京藝術大学大学美術館 陳列館
▶軍政下のミャンマーから作品を輸送し東京で発表

2024

1月

ジャカルタ
I-1: ジャカルタ p46
I-3: バンドン
Sua TERASIA Episode 1
▶ジャカルタ・Komunitas Utan Kayu, Teater Kubur
バンドン・Selasar Sunaryo Art Space, ISBI Bandung
▶対面でのフェスティバル。
タイ・日本・インドネシアのチームが集合。

2025

1月

ジャカルタ
I-2: チアンジュール p52

Sua TERASIA Episode 2
▶チアンジュール・Kilometer 95 Kopi,Cianjur
Creative Center,
Dewan Kesenian Cianjur / グヌン・パダン
▶チアンジュールにミャンマー・日本・インドネシアチームが集う。グヌン・パダンで儀式を行う。

本書に登場する 主なテラジアコレクティブメンバー

※ () 内は、本文中に使用される略称・愛称

2018-2019
テラジア前史
p.12~



坂田ゆかり (ユカリ)
[日本]

渡辺真帆 (マホ)
[日本]



稻継美保
[日本]

田中教順
[日本]

2020-2021
オンライン期
p.18~



ナルモン・タマプルックサー
(ゴップ) [タイ]

ディンドン W.S. (ディンドン)
[インドネシア]

ズン・エイ・ピュー (ズニ)
[ミャンマー]



ソノコ・プロウ
[タイ]



グラム・タム
[タイ]



グリット・レカケン
[タイ]



トーポン・サメージャイ
[タイ]



グエン・ハイ・イエン
(レッド) [ベトナム]



カミズ
[ミャンマー]

2022-2023
オンラインサイト期
p.30~



ユスティアン・シヤ・ルスマナ
(ティアン) [インドネシア]



スギヤンティ・アリアニ
(スギ) [インドネシア]



ラウェ・サマガハ (ラウェ)
[インドネシア]

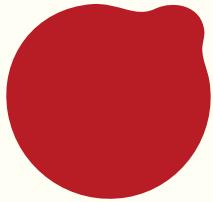


ティラ・ミン
[ミャンマー]



ソウ・モウ・トウ
[ミャンマー]





TERASIA

2018-2019

テラジア前史

—コロナ以前、『テラ』から始まる—

テラジア前史
『テラ』チュニジアに飛ぶ

「テラジア | 隔離の時代を旅する演劇」は、ある一本の演劇作品から始まりました。

2018年11月、日本・東京で開催された国際舞台芸術祭「フェスティバル/トーキョー18」にて、『テラ』という演劇作品が上演されました。これは演出家の坂田ゆかり、俳優の稻継美保、ドрамー・パーカッショニストの田中教順、ドラマトゥルクの渡辺真帆による、「寺」や「仏教」をテーマにした作品です。「まちなかパフォーマンスシリーズ」と題された本作は、大きな劇場の中ではなく、東京・西巣鴨にある西方寺という寺にて行われました。日本仏教・浄土宗の寺である西方寺をリサーチしながら、4人で話し合い、様々な要素を織り込んで、戯曲を作りあげていきます。

作品のベースは小説家・三好十郎の詩劇『水仙と木魚——少女の歌える——』(1957) から。主人公・京極光子きょうごくみつこはお寺の一人娘。病気がちな彼女を見舞いに来てくれる隣人の昇。詩劇の登場人物を元に、様々なシーンが並びます。稻継美保演じる京極光子は、時に観客に直接語りかけ、時に吉岡実や富岡多恵子といった詩人による文学作品を語る。一方、田中教順は、昇を演じつつ、寺の長男に生まれた個人の来歴と生い立ちにまつわる仏教小話を展開し、演奏をする。寺を取り巻く地域の記憶、住職へのインタビュー、浄土宗の經典・浄土三部經の『無量寿經』など、いくつものピースが埋め込まれて作品が構成されています。シーンの合間には、仏教における輪廻転生を象徴するように、京極光子が何度も退出し、そして装いを変えて登場。仏教の教えを元にした歌(ポップソング調、ロック調など様々)を歌い、上演は音楽とともに進行していきます。そして特徴的なのが、観客一人一人に用意された木魚。途中、演者から語りかけられた質問に、観客は手元にある木魚で「YES/NO」といった回答を表明するのです。そして上演の後半には108の質問が観客に投げかけられています。「友達がもっと欲しい?」「有名になりたい?」「死んだら、死んだ家族に会いたい?」。そして最後にこう問われて終わるのです。「あなたは誰?」「あなたたちは誰?」

『テラ』はいくつもの物語の断片で構成されています。それらの中に、仏教的問い、ひいては「生と死」にまつわる様々な問い合わせが散りばめられているのです。この『テラ』という作品が、テラジアの出発点となっていきます。

公演当時、『テラ』は宗教への関心よりも先立って、新しいツアーパンのシステムを作ることにモチベーションがあったと、ドラマトゥルクの渡辺真帆は語っています。



公演のようす。歌う曲に合わせた衣装が披露される



108の質問。108という数は仏教の「108の煩惱」から

完成した作品を別の会場に持っていく従来型の巡業と、流行りのサイトスペシフィックな滞在制作、その両方の限界を感じていた演出家・坂田ゆかりは、全国に7万以上あるお寺を潜在的な公演場所と捉え、新たなお寺に行く度に中身を壊しては作り変えなければならない非効率な行脚のスタイルを思い描きました。「破壊」しなければ次の創造はできないと考えたのです。(中略) 新たなお寺との縁がある度、『テラ』はバラバラに解体され、生まれ変わります。作品も、作り手も、寺を取り巻く人びとも、前の姿には戻れません。でも、壊さなければわからない、思いがけないところにこそ風穴になりえる隙間があるのでないでしょうか。破壊と創造を繰り返す遊行の支度は整いました。

(『テラ』公演パンフレットより)

日本の現代演劇における興行方法は、一定規模の作品を最初に制作し複数の劇場等を巡回・興行するツアー型や、地域をリサーチしその土地ならではの作品を作る滞在制作型などがあります。前者は公共・私立劇場による製作などが主流ですが、初演制作費用やツアーに係る人的・物的資金、受入劇場との連携、人員の長期拘束など、若手のアーティストには難しい興行方法です。一方後者は、芸術祭やアートプロジェクトにおいて比較的用いられる方法ですが、土地に根ざした作品を作ることができる反面、他の地域や文脈では展開しづらく、再演や興行が難しいという側面もあります。『テラ』の新しいツアーシステムはそのどちらでもなく、日本国内の寺という場所のみを制約とし、アーティストが全国を行脚(僧侶が諸国をめぐり歩いて修行をする)するように、土地土地の寺で作品を作ろうというものでした。日本には様々な宗派の寺が全国に約7万ほどあり、その多くは歴史が長く、かつ地域に根ざした存在です。しかし宗派や土地の風土が異なるので、都度、場所の特性を生かして作品を壊したり作り直したりする必要があり、作品は常に変化を必要とする。そのような『旅』のイメージを持って作品を展開しようと考えたのでした。このアイデアは、「テラジア | 隔離の時代を旅する演劇」に発展していくうえでも、根底に引き継がれていきます。

では、その後の展開を見てみましょう。



『テラ』 2018年11月14日～17日 日本／東京 西巣鷗 西方寺

作・演出：坂田ゆかり 出演：稻継美保 音楽：田中教順 ドラマトゥルク：渡辺真帆 衣裳：藤谷香子 (FAIFAI)

音響：福岡功訓、堀籠勇矢 (Flysound) 舞台監督：佐藤恵

『テラ』 チュニジアに飛ぶ

2019.

『テラ』の初演から少しして、坂田ゆかり（以下、ユカリ）とドラマトウルクの渡辺真帆（以下、マホ）は『テラ』の上演先を探していました。それぞれのツテをたどったり、演劇関係の知人とやりとりをした記録が残っています。

初演から約1年後。『テラ』はチュニジアの「カルタゴ国際演劇祭」に招待されます。マホが演劇祭の関係者から連絡を受け、まずアフリカに飛ぶことになりました。演劇祭には日本初演版の『テラ』をそのまま持ち込み、戯曲は翻訳され字幕で投影。主役の京極光子役は俳優の岩澤侑生子、音楽は引き続き田中教順、通訳にはエジプト出身のハイサム・シーミ、衣裳には初演も担当した藤谷香子が集まり、ほぼ手弁当で参加しました。会場は演劇祭側がセッティングしたアートスペース。チュニス、モナスタイル、ザグアンの3都市を巡演しました。

イスラム文化圏で作品を上演するにあたり、何よりもまず必要だったのは、観客にとって馴染みの薄い日本仏教について詳しく説明することです。日本仏教とはどういったものか、『テラ』の作品背景はどういうものか。上演に先立ってガイドを入れ、『テラ』をチュニジアの観客に披露しました。イスラム文化圏の観客層と、日本仏教の要素を取り入れた『テラ』が出会う。異なる文化圏の作品を紹介できるのは、国際演劇祭ならではの機会です。公演は、先に述べた従来のツアー型の興行に近い形態で行われましたが、結果的には、巡回先各地で満席となり観客は前のめりで観劇。観客に渡された木魚のバチが折れるほどの熱狂もありました。

初めての海外公演は、『テラ』を日本の外に持ち出すという実績を生み出しつつ、新たな発見をもたらしてくれました。「土地に合わせて解体と創造を繰り返す」。このチャレンジは、どうやったらより実現するのだろうか。チュニジアでの経験をひとつの契機として、ユカリやマホは新たな展開のイメージを持つようになりました。『テラ』が扱う仏教のエッセンスや、寺をベースにしていることを踏まえると、仏教の文化がある国や地域で展開するのが良いのではないか、と。もちろん、「仏教」とひとくちに言っても、その教義や慣習は国や地域、そして歴史的背景によって様々に発展し、あらゆる宗派が存在しますが、同時に、その根源には通底する概念や精神があるとも考えられます。全く異なる宗教圏で『テラ』を展開する前にまず、仏教圏の国や地域をベースにして、『テラ』を作り変えていく。旅のイメージがチュニジアツアーを経てアップデートされました。



チュニス公演。スクリーンに手描きのスライドショーで仏教についてガイドが入る

チュニジアでの公演を終え、ユカリとマホは『テラ』の今後の展開を見据えて、日本で合同会社の立ち上げに取り掛かります。そして、新型コロナウイルス感染症の感染者が世界で初めて報告されたのは、このチュニジアツアーとほぼ同じころ。しかしこの時はまだ、彼らも、そして世界も、「隔離の時代」がやってくるとは知る由もありませんでした。



『テラ』チュニジア 3 都市ツアー

2019年12月10日～14日

チュニジア / チュニス ISAD Institut Supérieur d'Arts Dramatiques / モナスタイル Centre des Arts Dramatiques et Scéniques de Monastir / ザグアン Centre des Arts Dramatiques et Scéniques de Zaghouen

演出：坂田ゆかり

出演：岩澤侑生子

音楽：田中教順

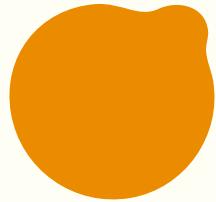
ドラマトゥルク：渡辺真帆

衣裳：藤谷香子 (FAIFAI)

通訳：ハイサム・シーミ







TERASIA

2020-2021

オンライン期

—新型コロナウィルス感染症の流行とテラジアの誕生—

隔離の時代のはじまり

タイ版『TERA テラ (テラ・テラ)』の誕生
ベトナムチームとの出会いと、ミャンマーの情勢
『TERA テラ (テラ・テラ)』から『テラ 京都編』へ
会えずとも、オンラインでつくる オンラインウィーク2021



隔離の時代のはじまり

2020.

チュニジアでの公演を踏まえ、『テラ』の展開を積極的に進め始めたユカリとマホ。2020年2月には、国際舞台芸術ミーティング「TPAM2020」（日本・横浜）にて『テラ』をプレゼンし、アジア圏への展開を見据え、英語資料などを作り始めました。日本国内の寺を行脚するイメージがさらに拡大し、『テラ』を世界各国で、その土地土地でリサーチをして作品を展開していきたい、とユカリたちは考えるようになっていました。合わせて、スリランカとインドでの『テラ』の上演が新たに決まり、着々と準備を進めます。

また、日本国内での受け入れ先も引き続き検討しており、新潟・佐渡島、福井、奈良など、各所の寺に足を運びました。もちろん、行脚するにも最低限の制作予算は必要なため、芸術祭や地域の助成金も調べながら、様々な場を探します。そして2020年3月に、ユカリとマホは京都の興聖寺を訪れ、『テラ』を上演させてほしいと住職に打診しています。京都滞在中は興聖寺で朝6時半から行われる座禅に毎日通い、座禅後の掃除を手伝って檀家さんたちと話をしながら、興聖寺や地域について知る機会を得ました（このリサーチは2021年の『テラ 京都編』につながるため、後ほど詳しく扱うことにしましょう）。

このように積極的に『テラ』の展開を進めていた矢先、新型コロナウイルス感染症は世界中に拡大していきました。WHOが新型コロナウイルス感染症に対し、世界的な危険性が「非常に高い」と評価を引き上げたのは2月末頃のこと。3月に入ると各国で感染者は急増し、海外渡航制限が始まります。ロックダウンに踏み切る国々が増え、外出するも難しい状況となっていました。日本で初めてロックダウンの措置（緊急事態宣言）が実施されたのは4月初めのことです。社会全体でコミュニケーションの場はオンラインに移行し、演劇やアートの分野でも同様にオンラインのコンテンツや創作方法が模索されます。『テラ』もこの波の影響を受け、スリランカとインドでの公演計画は頓挫してしまいました。

しかしながら、このコロナ禍が『テラ』に大きな変化のきっかけを与えたのも事実です。2020年5月頃、ユカリとマホは国際交流基金バンコク日本文化センターの助成金の申請をしようと検討していました。この時、マホが親交のあったタイの演出家ナルモン・タマブルックサー（以下、ゴップ）に連絡を取ったことをきっかけに、『テラ』は大きな変化を迎えます。マホの相談は、ゴップと協働し、『テラ』をオンライン上で上演や公開ができないか、あるいはコロナが落ち着いたらタイの寺院で上演できないか、というものでした。それに対し、ゴップはよりアクロバティックなアイデアを返してきたのです。それは、タイの寺でタイのアーティストたちによる『テラ』を創作する挑戦をしてみたい、というものでした。

「最初に（日本版『テラ』の）台本を読んだんですよ。物語に複数のレイヤーがあり、示唆に富んでいて、洗練された構成でした。でも、どうやって上演するのか見当がつかなかった。上演の映像を見て、なるほどこうやるのか！そういうことだったのか！といちいち合点がいきました、すごく面白かった。ただ、これを日本人がチェンマイのお寺で上演するのは不可能です。タイのお寺でロックなんて演奏したら蹴りだされてしまいます。そもそもコロナで渡航は難しいわけだし、だったら、チェンマイのチームでやってみようと思いつきました」（ゴップ）

（テラジア アーティストインタビュー vol.6 より）

このゴップの提案により、人が行脚するのではなく、『テラ』という作品だけが海を渡るという、「隔離の時代を旅する演劇」の構想が始まりました。ウィルスが人から人に感染し、上陸した土地で変異するように、オリジナルの作品が作者の手を離れ、旅先で解体され再構成されて生まれ変わり、広がっていく。その後、ゴップは驚くべきスピードで仲間への声掛けも行いました。ゴップがこれまで親交のあったアーティスト、ミャンマーのズン・エイ・ピュー（以下、ズニ）、インドネシアのディンドン W.S.（以下、ディンドン）に声をかけ、彼らはそれぞれの興味を元にこのプロジェクトに参加を表明しました。こうして、オンラインで結ぶコレクティブ「テラジア | 隔離の時代を旅する演劇」（以下、テラジア）が生まれたのです。

ここで、2018年の『テラ』の構想を振り返ると、作品を壊したり再創造しながら変化していくという当初のイメージは、テラジアに深くつながっていることが分かります。そこに世界的パンデミックという特殊な状況が加わったことにより、「感染」「変異」といったキーワードが新たに差し挟まってきたと言えるでしょう。同時に、テラジアには以下の新たな問い合わせが含まれています。

—— 国境をまたぐ移動をせずに国際協働創作は可能か？

—— 従来のようにアーティストが移動するのではなく、作品に旅をさせてみてはどうだろうか？

テラジアのアーティストたちは、コロナという未曾有のパンデミック下において、「感染」や「変異」といった言葉すらもポジティブに転用し、「いま・この時」にしか生まれ得ない国際協働創作の可能性を見出し、新たな挑戦を行うことにしたのでした。

「同じテーマの作品が異なる国で制作され、変異しながら新しい場所に広がっていくことは、すごくエキサイティングだと思います」（ゴップ）

（引用元同上）

タイ版『TERA เทラ (テラ・テラ)』の誕生

2020

テラジア結成当初、プロジェクトの構想として、2020年にタイ、2021年にミャンマーで作品を展開する計画が立てられました。そして2023年頃、パンデミックが落ち着くと見込まれる時期にインドネシアで対面で出会い、作品を作る。これが当初描かれた大まかな指針でした。

テラジアが結成されたのは2020年5月。早速タイではその夏から、ゴップを中心に、タイ北部の中心都市・チェンマイを拠点とするアーティストらが集い、活動が始まりました。ゴップたちは東京で作られた『テラ』を大胆に解体し、メンバー内で死生観や宗教観をヒアリングしながら創作を進めていきます。

公演会場はチェンマイの名所ドイ・ステープ国立公園内に位置するパーラート寺院¹。二体の像に守護された入口に入った観客は、演者に導かれながら山中に広がる境内を屋外から屋内へと進んでいきます。緑に囲まれ、境内には清流の音が響く。清逸な空気に満ちた場。そこで、俳優のソノコ・プロウとドラマトウルク兼任のグラム・タム、音楽家のグリット・レカクンヒトーポン・サメージャイの4名の出演者により、様々な物語の断片が語られます。パーラート寺院の由緒や仏教思想に関するレクチャー、俳優個々人の体験に基づいたモノローグ、『極楽に行った猫²』という本を基にした仏教絵師と日本人の老女にまつわる物語……。観客はカエルの形をしたギロを持ち、物語の合間に俳優から投げかけられる108の質問に返答をする際に、カラコロと鳴らします。上演は音楽とともに進行し、タイ北部の伝統楽器であるサローやピンピア（弦楽器）、ピー・ナイ（縦笛）、タイの伝統楽器タポン（両面ドラム）などが多彩に用いられました。

こうして生み出された新作『TERA เทラ (テラ・テラ)』。タイ仏教やチベット仏教の思想・経典、北タイの伝統文化や音楽、神話、哲学、瞑想、舞踏など、死生観にまつわる新たな要素がふんだんに織り込まれ、タイの観客に届けられました。また、タイの寺院では現代劇の上演はほぼ前例がなく、芸術に理解のある住職のおかげで実施できたとゴップは言います。

なお、制作予算については、前項で述べた国際交流基金バンコク日本文化センターの助成金は落選し、テラジアは続いて国際交流基金アジアセンターの申請にチャレンジしていました。しかし採択の結果が出たのは『TERA เทラ (テラ・テラ)』の公演実施の直前。つまりタイチームは、安定した資金源を持たず不確定な状態の中で、創作を進めていたことになります。にも関わらず、ゴップたちは強い熱意を持って驚くべきスピードで公演を成功させました。ゴップはこう語っています。

「演劇を作るのに資金の大小は関係ない。資金がなくても、小規模でローテクでも、インパクトがある表現活動はできる。テラジアで実験的にやってきたクロスボーダーなプロジェクトはその好例です。こういう活動を、いろんなスタイルで、いろんな地域で、もっと多くの人がやり始めたら、表現の幅が格段に広が



『TERA เทラ (テラ・テラ)』公演のようす



りますよね。公衆衛生的にも、劇場に人をぎゅうぎゅう詰め込むのはよくないわけでしょ。だったら演劇は劇場空間に縛られない形で自在に進化すればいいんじゃないでしょうか。」(ゴップ)

(テラジア アーティストインタビュー vol.6 より)

公演から約2週間後には、公演の映像を配信しながら、タイと日本のチームがオンライン上で、プロジェクトについて語り合う企画も実施されました。特筆すべきは、日本の『テラ』チームが作品とコンセプトをゴップたちに渡した以外、創作には関与せず、出来上がった『TERA เทラ (テラ・テラ)』を映像で初めて見たという点です。まさに作品だけが旅をし、新たにタイの地で、タイを拠点とするアーティストたちの手により「変異」を遂げた瞬間でした。テラジアのコンセプトは、『TERA เทラ (テラ・テラ)』によって、早くもひとつの実践として成功を収めたのです。けれども、このタイ版を皮切りに、テラジアはさらに、当初の想像を超えた「変異」を繰り返していくことになります。旅はまだ始まつばかりです。

¹ランナー王朝 (1296 ~ 1775) におけるクーナー王 (1355 ~ 1385) の時代に建立された。ドイ・ステーブ山の斜面に位置する仏教寺院。

²『The Cat Who Went to Heaven』エリザベス・コーツワース著 (1930)。仏教を題材とした日本が舞台となる児童文学。涅槃図の作成を依頼された絵師と猫の交流を描く。1931年にアメリカの児童文学賞「ニューベリー賞」大賞を受賞した。



『TERA เท拉 (テラ・テラ)』 2020年10月16日~18日 タイ / チェンマイ バーラート寺院

演出：ナルモン・タマブレックサー 出演：ソノコ・プロウ、グラム・タム 音楽：グリット・レカクン、トーポン・サメージャイ

特別出演：ティーラウィット・ジラワッタノ師 ドラマトウルク：ソムワン・ゲオスフォン博士、グラム・タム

ベトナムチームとの出会いと、ミャンマーの情勢 2021。

2021年2月10日。国際舞台芸術ミーティング「TPAM2021」（日本・横浜）にて、テラジアはプレゼンテーションに参加しました。日本のマホと『テラ』日本初演から伴走していた興行研究者の田中里奈、タイのゴップが登壇し、テラジアの経過を報告します。プロジェクトを広くプレゼンテーションすることや仲間集めも目指しての参加でした。その直後、このプレゼンテーションを聞いていたベトナムのアーティスト、リン・ヴァレリー・ファムがテラジアに興味を持ち、マホに声をかけてくれました。リンは、ベトナムチームの中心となるグエン・ハイ・イエン（以下、レッド）とテラジアに参画し、コレクティブには新たにベトナムチームが加わることになったのです。

このプレゼンテーションの10日前、2021年2月1日。世界には新たな衝撃が訪れていました。ミャンマー国内で軍事クーデターが勃発し、ミャンマー国軍は全土に非常事態を宣言。国家の全権を掌握したと表明しました。その後、民主派勢力と軍との衝突は相次ぎ、民間にも多大な被害が出ています。本書制作時の2025年においては、クーデターから4年以上が経過する現在でも、国境地帯やその周辺地域を中心として軍と民主派勢力、そして少数民族の武装勢力との間で激しい戦闘が続いている、軍による攻撃や弾圧などで亡くなった市民は6000人以上にのぼります¹。当時、多くのアーティストが軍によって拘束され、人を集め公演はおろか、創作のために稽古場に集まることすら身の危険が及び、あらゆる創作活動が停止されました。無論、テラジアに参加しているミャンマーのアーティストたちも、それまでの活動をストップせざるを得ない生活になってしまいます。（プレゼンテーションに登壇を予定していたミャンマーチームは、当然ながら欠席を余儀なくされます。）

先に述べたとおり、テラジアでは結成当初、2020年にタイ、2021年にミャンマーで作品を展開する構想を練っていました。タイで予定通り2020年に上演が実施された頃、ミャンマーチームもその傍らで着々と準備を進めていたのです。中心メンバーであるズニは、複数のアーティストとともにパフォーマンスのシリーズを制作することを構想し、動き始めました。ミャンマーの各地域、各民族それぞれの葬儀の伝統や、物語などを参照したパフォーマンスを創作してもらおうと、すでにアーティストや伝統音楽家、各地域の音楽家に声をかけていたのです。上演は古い墓地でやりたいと、すでに会場との調整も始まっていました。しかしながら、この『テラ ミャンマー』のプロジェクトは、2月1日を境に立ち消えてしまったのです。



リン（左上）、まほ（右上）、レッド（左下）、ゴップ（右下）での初zoom。ベトナム正月の元日頃。

¹ビルマ政治囚支援協会（Assistance Association for Political Prisoners）公表によると、軍による攻撃・弾圧による犠牲者（死者）6499人、逮捕者総数 29030 人、うち拘留中 22197 人（2025年4月11日現在）。参照：<https://aappb.org/>
加えて、2025年3月28日にはマンダレー近郊を震源地とするマグニチュード7.7の大地震が発生した。現地の実権を握る国軍は死者3700人、行方不明者120人以上（4月19日現在）と発表しているが、軍は過去の災害では被害規模を少なく発表しており、地震被害の実態は明らかになっていない。加えてクーデター以降の通信制限、医療体制の脆弱化など、軍政権下の影響により被災者支援活動が進まない状況にある。

『TERA တော် (テラ・テラ)』から『テラ 京都編』へ 2021.

ミャンマーチームのその後の動きについては、また後ほど触れることにしましょう。

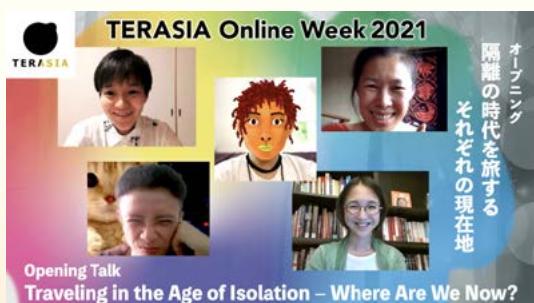
一方その頃、日本では、タイの『TERA တော် (テラ・テラ)』に刺激されるかのように、東京で初演した『テラ』のチームが再集結して、『テラ』をアップデートした『テラ 京都編』の創作を行っていました。会場はパンデミック直前にユカリとマホが訪れていた京都の興聖寺。東京で『テラ』を上演した寺は浄土宗でしたが、京都では臨済宗（禪宗）という異なる宗派のお寺です。どんな宗教においても共通して言えることですが、日本仏教においても、宗派が違うと教義や慣習も大きく異なることがあります。加えて、会場となるお堂に祀られる仏も違うのです。『テラ』の西方寺本堂は、極楽浄土の創造主である阿弥陀如来。『テラ 京都編』の興聖寺涅槃堂は、地獄の救済主である地蔵菩薩。コロナ禍以前に創作された『テラ』を「極楽編」と通称するならば、コロナ禍に創作する『テラ 京都編』は「地獄編」と称して、対をなす2つの『テラ』を作ることに。極楽浄土と地獄。扱う仏や参照する教えが異なれば、創作においても導かれる物語は変わってきます。『テラ』の構成を引き継ぎつつも、京都の興聖寺における宗派や地域の性質に合わせ、多くのシーンが新たに作り足されました。最終的に、Instagramのライブ配信を模したシーンや、日本の大衆演劇のエッセンス、興聖寺に伝わる聖典など、新たな要素と台詞を加えた新作『テラ 京都編』が生み出されました。客席数は制限され、観客はマスクを着用し、傍らにはアルコール消毒液。コロナ禍が未だ収束しない中、感染対策をしながらの実施となりました。それでも、興聖寺の檀家さんなど地域の方々も多数来場し、満席の客席には木魚のボクボクという音が響き渡りました。

この時点で、テラジアには主に3つの作品がありました。『テラ』『TERA တော် (テラ・テラ)』『テラ 京都編』です。そして、コレクティブとして、日本・タイ・ミャンマー・インドネシア・ベトナムの5つの国の一アーティストたちが参画しており、それぞれのプロジェクトを構想しています。このテラジアという未知のプロジェクトの有り様をいかに対外的に伝えていいか。また、『TERA တော် (テラ・テラ)』『テラ 京都編』を広く公開できないだろうか。そういう思いがつくり、テラジアではオンラインでのコンテンツ公開の検討が始まります。この時、新型コロナウイルス感染症の流行からは、およそ1年が経とうとしていました。世界の感染状況は一進一退。パンデミックの終わりは、まだ遠く先にあるようでした。



『テラ 京都編』 2021年3月26日～28日 日本/京都 臨済宗 興聖寺 涅槃堂

演出：坂田ゆかり 出演：稻継美保 音楽：田中教順 ドラマトゥルク：渡辺真帆 衣裳：藤谷香子 (FAIFAI) 制作：宮武亜季





会えずとも、オンラインでつくる オンラインウィーク2021 2021

テラジアを通して各地で生まれつつある作品。国境をまたがずに創作を行うコレクティブ。コロナ禍の只中において、まだ見ぬ観客と出会い、テラジアを知り、見てもらうにはどうしたらよいのだろう？国を行き来するには未だ難しい2021年の11月下旬。テラジアはさらに新たな出会いを求め、「テラジア オンラインウィーク2021」と銘打ったオンラインイベントを開催します。ユカリ・マホが運営の中心を担い、ファシリテーターに興行研究者の田中里奈を迎え、観客にも分かりやすく見えるよう、国ごとに枠組みを設定。それぞれのチームにコンテンツを作ってもらうスタイルで進め、作品やトーク映像を完全オンラインで連続公開するミニフェスとして、10日間にわたり実施されました。タイトルは「虹藏不見 (にじかくれてみえず)」。日本の古い暦で11月下旬を表す言葉で、弱い太陽光線と乾燥した空気のもとでは虹がなかなか姿を現さないことを意味します。コロナ禍の収束が未だ不透明な当時の空気感を反映した名称でした。

オープニング、クロージングなどのトークはライブストリーミングで行いました。それは、対面で会えない代わりに、リアルタイムでつながることを重視していたゆえの選択かもしれません。以下に、各国での実施内容を見ていきましょう。



特設サイト



日本

- 『テラ 京都編』の映像公開
- ミニ情報を語ったトークイベント：制作の裏話や、作品の補助線を語る。
- 座談会：『テラ』→『テラ 京都編』への変遷、創作を振り返る。



タイ

- 『TERA タイ (テラ・テラ)』の映像公開
- ミニ情報を語ったトークイベント：制作の裏話や、作品の補助線を語る。
- 座談会：『TERA タイ (テラ・テラ)』を振り返り、その後の社会状況の変化、『テラ 京都編』やテラジアの今後について語る。



タイ・日本

- 『往復書簡：テラとTERAの音楽をめぐって』
- タイのグリット・レカケンと、日本の田中教順による往復書簡。互いの作曲や音楽観について書簡を交わし音源を送り合い、ひとつの音楽を作りあげた。



ベトナム

- 『TERA Vietnam』の作品構想プレゼンテーション
- 映像作品を制作するためのリサーチを開始したベトナムチーム。映像作家であるレッドの出身地・ベトナム北東部にある洞窟寺院で制作を予定する作品について、構想・アイデアが共有された。



ミャンマー

- 覆面アーティストのカミズによる『Masking Death』
- 映像作品とワークショップ動画。新たにテラジアに参画したカミズによる、バーチャルな参加型アートプロジェクト。世界中から集まった様々な「マスク」を用いる。
- 座談会：ミャンマー出身のアーティストたちが、日本の『テラ』とタイの『TERA タイ』について死生観という観点から客観的に語り合った。



インドネシア

- クロージングトーク「旅の目的地—テラジアサミット2023 in インドネシアに向けて」：ディンドンらによるトーク。インドネシアでの今後の創作や構想について語る。



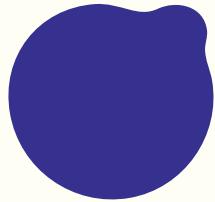
オンラインウィークの幕締めは、クロージングトークのリアルタイム配信です。これには、インドネシアのディンドンが参加。テラジア発足当初から構想している、2023年頃のインドネシアでの上演について、ディンドンによって改めて展望が語られました。インドネシアは仏教ではなくイスラム教が多数派であるという背景がありますが、パンデミック下での国際協働のビジョンと、生死や人間の歴史といった『テラ』のテーマの普遍性に共感したディンドンは、宗教の枠組みを越えた儀式的な作品創作を計画していました。この頃には、インドネシア版『TERA Indonesia』の公演を2023年夏に構想しており、同時に全チームが集合するプロジェクト全体のフィナーレイベント、「テラジアサミット2023 in インドネシア（仮称）」の開催を目指していました。

「既存の価値観が見直される今、『テラ』を通して過去や自然に立ち返りたい」と語ったディンドンは、東南アジア最大の巨石遺構であるグヌン・バダン古代遺跡でのパフォーマンスを企てていました。テラジア始動から3年が経つその頃に「隔離の時代」が終わっていれば、国境を越えてメンバーが一堂に会し、対面での協働創作が可能になるでしょう（それが最終的にどう結実していくかは、ぜひ本書を読み進めてみてください）。クロージングトークは、ディンドンとともにゴップ、レッド、マホ、カミズが登壇、田中里奈がファシリテーションを担い、これらの構想を観客へ共有する時間となりました。

このオンラインウィークは、テラジアにおいて各国のチームが互いの作品についてコメントし、話し合う初めての機会でした。物理的に国境をまたぐ人の往来が未だ難しい世界情勢の中で、互いの創作状況や生活の様子を確認し、そしてアーティスト同士の目線でそれぞれの創作を客観的に見つめ直す好機にもなったのです。また、新たなチャレンジとして、オンラインで公演映像の販売も行われました。『TERA ケラ（テラ・テラ）』『テラ 京都編』をチケット制で公開し、オンラインの観客拡大を目指したのです。しかし、ふたを開けてみると、各国の売れ行きには大きな差が見られました。日本では当時「Zoom演劇」や「オンライン演劇」という新たな演劇形態が模索され、課金や投げ銭の仕組みについても様々な実験が行われていましたが、国によってオンライン課金に対する観客の認識や文化には大きな違いがあることが分かりました。やってみないと分からぬことばかり。オンライン販売の仕組みを一律に設定することは難しいと、テラジアは学びました（結局、翌年のオンラインウィークではチケット制は廃止されたのでした）。

直接会うことは出来なくても、オンラインで作品を集合させることはできる。オンラインウィークは、コンテンツが全てオンライン上で鑑賞されることを前提にした企画でした。作品映像の公開、作品にまつわるトークや座談会、記事や音楽。様々なコンテンツを持ち寄ることで、各国のアーティストや観客が気軽にアクセスできるプラットフォームを作る。そういったチャレンジでした。34ヶ国のお客様が特設サイトへアクセスし、アジアだけでなく、アメリカ、ヨーロッパ、中東地域からも閲覧されました。（なお、このオンラインウィーク2021および前述したタイ『TERA ケラ（テラ・テラ）』は、2年間にわたって国際交流基金アジアセンターの助成を受け、実施することが叶いました。）そしてオンラインウィークは翌年、さらに発展して実施されることとなります。続きをていきましょう。





TERASIA

2022-2023

オンラインサイト期

—次々と変異していくテラジア—

モノが移動する 展覧会『Masking/Unmasking Death』

初めて集う インドネシア滞在リサーチ

ミャンマーでの新たな創作 『လျည်းသီးရာများ 較』

記憶とルーツに潜る旅 ベトナム・ランソンリサーチ

各々の言葉で語られ始めるテラジア オンラインウィーク2022+オンラインサイト

Sua TERASIAへ向けて 調整と選択

モノが移動する 展覧会『Masking/Unmasking Death』 2022

2022年3月末頃、アーツカウンシル東京の助成プログラムに申請し、3年間の長期助成を得られるか、固唾を飲んで待っていたユカリとマホ。彼らはひとつの展示に向けて動いていました。

先のオンラインワークでマスクの映像を届けてくれたミャンマーの覆面アーティスト、カミズの展示を日本で行えないかという計画です。もともとカミズは、ミャンマーのクーデター以後、犠牲になった人々 (Fallen Heroes : 倒れた英雄たち) の顔をかたどったマスクを継続的に制作し、SNS上で発信していました。それを見たユカリは、2021年の春頃から、日本でこれらのマスクを展示することができないかと可能性を探り始めます。そこで、東南アジアの美術や文化的アクティビズムの研究者でありインディペンデントキュレーターの居原田遙に声をかけ、ユカリ、マホ、カミズ、居原田遙の4人による最初のミーティングが実現しました。カミズはその頃のことをこう語っています。

「まず初めに、作品をそのまま展示するか否かという議論がありました。展覧会をするためにマスクをつくったとは思われたくなかったですし、(中略) もともとは命を落とした方々のために何かできないかとやっていたもので、私自身にとってのヒーリングでもあったものなので。それを展覧するか否かという問題は、私と日本メンバーとの話し合いの中で色々と議論をしました。話す中で、これも革命の一端となりうるのではないか、あるいは、倒れた英雄たちのトリビュートとして、より彼らを讃えることになるのではないかということになり、展覧会を実施することになりました。」(カミズ)

(テラジア アーティストインタビュー vol.4より)

カミズが作る白いマスクは、1枚の紙を折り紙のように折って作られています。そもそも軍の検閲があるミャンマーから日本へそれらを無事に届けることができるのか。まずは輸送テストから始めました。そして2022年5月、東京・上野にある東京藝術大学の陳列館で、展覧会『Masking/Unmasking Death』が開催されたのです。

展示空間に吊るされたのは、白いネット¹と100枚のマスク。床にはQRコードが貼られています。QRコードは展示されているマスクひとつひとつに対応しており、来場者はQRコードを読み取ると、そのマスクの顔の人、すなわち犠牲者のプロフィールや情報にたどり着きます。性別、年齢、職業、いつ・どこで命を落としたのか……。来場者はひとつひとつ、マスクと、その顔の持ち主の情報に向き合います。また展示のイントロダクションとして、クーデター勃発からミャンマーで起こってきた出来事の情報がまとめられ、これまでに行われてきた文化的な実践の事例を、テキスト、画像、写真、絵画など多様なメディアを用いて紹介。会場の中央には、紙でできた白い「湖」が広がります。輪廻の象徴であるような湖は、倒れた英雄たちの死後の平穏を願い、また展覧会の来場者が「死」と向き合い、考える場として作り出したとカミズは言います。展示のハンドアウトにはこう残されています。

「この展示には複数の本質があります。2021年2月以来の革命で、軍事政権／国軍の恐怖と抑圧からの自由を求めて闘い、英雄として命を落としたすべてのミャンマー市民に敬意を表し、名誉を授ける場。彼／彼



展示のようす



彼らの死から仮面を取り扱うと、その高潔さと、どんな人生を送っていたかがわかります。また、鑑賞者が自身にとっての「死」について内省し、思いを馳せる場もあります。(中略) この展覧会は私たち人間が連帯のエネルギーを感じ、生と死の認識を交える場なのです。」(カミズ)

(『Masking/Unmasking Death 死をマスクする／仮面を剥がす』会場配布資料より)

10日間にわたる会期で、来場者は2200人以上にのぼり、会場に設置された木のオブジェは来場者によるメッセージで埋め尽くされました。反戦や非暴力への意志、個人的な死生観、倒れた英雄たちへの追悼の言葉など……。会期中にはカミズがオンラインで展示会場とつながり、ワークショップを実施。出来上がったマスクは、湖の上に浮かびました。加えて、『テラ』の音楽家、田中教順によるマウン・ザイン²を用いた演奏も行われました。これら一連の物事によって、カミズが述べた通り、祈りの場そして生と死が交わり合う思考の場が作り出されていたのです。

この展示はテラジアにとって大きな経験となりました。これまで「コンセプトが移動する」プロジェクトとして進んできたテラジア。この『Masking/Unmasking Death』においては、実物の「モノ」(マスク)だけをミャンマーから日本に移動させました。もちろん、一般的な美術展においては、アーティスト本人が渡航せずに作品だけを送って参加する形式は珍しくありません。この展示が特徴的なのは、カミズの創作に共鳴したテラジアコレクティブのメンバーが、ミャンマーの地からマスクを預かり日本で公開している点、そしてカミズというアーティスト個人の展示でありながらも、テラジアが扱う「生と死」というテーマに深く連関した内容である点です。そういう観点から見ると、この展覧会はテラジアのプロジェクトの枠組みの上に位置付けられるでしょう。

一方でこの展示は、ミャンマーにおける暴力と抑圧の危機に対し、文化的連帯を表明するという、アーティストやキュレーターたちの意志とつながりから生まれたものもあります。生と死に向き合うこと、鎮魂の祈り、倒れた英雄たち、そしてミャンマーの今を伝えること……。マスクを媒介として、そういうことを遠く離れた日本で行うことが必要だと個人が動いた結果、この展覧会が実現したのでしょうか。

マスクという「モノ」だけを移動させ、アーティストらのつながりの上に展開された『Masking/Unmasking Death』。公開されたマスクはその後、しばらくの間日本で保管され、2025年にはインドネシアに渡ることとなります。

¹ミャンマーに古くから伝わる葬儀では遺体の横たわるベッドを白いネットで包む。展示の「ネット」のモチーフになっている。

²ミャンマーの伝統音楽であるサン・ワインにおいて演奏される打楽器。マウン・ザインは長方形の木枠にゴングが並べられている。

『Masking/Unmasking
Death 死をマスクする／
仮面を剥がす』
2022年5月1日～10日
日本 / 東京 上野
東京藝術大学大学美術館 陳列館
キュレーター：居原田遙
アーティスト：カミズ
企画協力：TERASIA
プロデューサー：
坂田ゆかり、渡辺真帆



2022年6月頃。テラジアは、アーツカウンシル東京の長期助成の採択を受けることができました。これは1回きりの発表活動に対する助成ではなく、リサーチやプロセスも含めた支援によって、芸術団体のステップアップの後押しを目的とした枠組みです。これにより、「パンデミック収束の時期にインドネシアで対面で出会い、作品を作る」というテラジアの当初の指針を、より現実的なものとして進めることとなりました。

2023年に「テラジアサミット（仮称）」を実施するにあたり、いきなりインドネシアへ行き大々的な催しを開催することは不可能だと、メンバーの誰もが思っていました。事前に少しづつ準備が必要です。夏頃、ユカリとマホはインドネシアのディンドンと今後の話し合いをスタートします。そしてディンドンは、新たな人物に声をかけ始めました。のちの「Sua TERASIA」で実施にあたり重要な役割を担うことになる、ジャカルタ拠点のアーティスト、ユスティアンシャ・ルスマナ（以下、ティアン）。そしてティアンはバンドン拠点の俳優、スギヤンティ・アリアニ（以下、スギ）も連れてきます。

2022年9月。テラジア発足以来、初めてメンバーが対面で出会いが叶いました。日本、タイ、ミャンマーからメンバーが集まり、ジャカルタでインドネシアメンバーと合流。各国のテラジアでのこれまでの活動や現状を細かにシェアし、今後について熱く意見を交わします。街を歩き、一緒に食事をしたり、ディンドンの拠点であるアートル・クブル¹を見学したり。ゴップのワークショップや、音楽のセッションも行いました。直接顔を合わせて話し合うことで、ミーティングもハイスピードで進んでいきます。

そしてこのミーティングにより、大まかに二つのことが決まりました。一つは、「テラジアサミット」という当初より計画されている企画を「Sua TERASIA」というタイトルにするということ。Suaはインドネシア語で「出会い」という意味。ディンドンのアイデアによって、この象徴的な企画名が決まりました。2023年10月頃の実施に向けて進もうと皆で合意します。

もう一つは前年も行ったオンラインウィークについて。オンラインだけでなく、新たに各地で「オンサイト」でイベントをやろうという提案です。それぞれの土地でイベントを実施することで、各地の観客に向けてテラジアを直接紹介でき、また新たな出会いも生まれるはず。早速それぞれがオンサイトイベント実施を目指して動き始めました。それぞれのオンサイトについては次の項で見ていきましょう。



ジャカルタでのひとコマ



アートル・クブルにてワーク・イン・プログレスを見学

さて、滞在リサーチのもうひとつの大きな目的にも触れておきましょう。新しく名付けられたテラジアの目標「Sua TERASIA」をどこで実施するか。その候補のひとつは、西ジャワ州チアンジュール県にあるグヌン・バダン古代遺跡（以下、グヌン・バダン）です。チアンジュール中心市街地から1時間ほど。死火山の頂上にある土と石で造られた、インドネシアで最も古い先史時代の遺跡で、古来より人々の信仰・瞑想の場として機能していたといいます。滞在中、メンバーは皆でこの土地を訪れました。ディンドンがミーティングの際に連れてきた音楽家、ラウェ・サマガハ（以下、ラウェ）がスンダ族の文化と音楽に造詣が深く、グヌン・バダンの人々とのネットワークを持っているということで、同行してもらいました。未だに歴史的にも詳しいことは分からぬ謎に包まれたグヌン・バダン。テラジアの旅のひとつの終着地として、そこで「儀式」と題したイベントを行うことを目論みます。

濃密な1週間の出会いを経て、テラジアは次のSua（出会い）へと走り始めました。まずは直近のオンライン・オンラインサイトイベント。開催までわずか2ヶ月しかありません。

¹ Teater Kubur。フィジカル・シアターを主眼におくジャカルタの劇団。演出家・ディンドン W.S. が主宰し、ジャカルタで 1983 年から活動している。墓地を意味する Kubur の名の通り、墓地に隣接するスタジオを拠点とし日々稽古を行う。公演のみならずワークショップ、コラボレーションの経験も豊富に持ち、国内外で活動を展開している。



グヌン・バダンにて。雨の降る中のぼった

インドネシア滞在リサーチ 2022年9月4日-13日

参加メンバー: [インドネシア] ディンドン W.S.、テアトル・クブルのみなさん、ラウェ・サマガハ、ユスティアンシャ・ルスマナ、スギヤンティ・アリアニ [日本] 渡辺真帆、坂田ゆかり、田中教順、富田了平（写真記録）
[タイ] ナルモン・タマフルックサー（ゴップ）、グリット・レカクン [ミャンマー] ズン・エイ・ビュー
※ベトナムチームは不参加だったが、渡辺真帆が1ヶ月ベトナムに滞在。レッドらとともにリサーチを実施。



滞在記

ミャンマーでの新たな創作『လျှပ်းဘီးရာများ 較』 2022

ではここで、各国の動きを少し細かに見ていきましょう。まずはミャンマー。テラジア発足期から参加しているズニの『テラ ミャンマー』のアイデアが、クーデター以後、立ち消えになってしまったことは2021年の頃で述べた通りです。2022年9月のインドネシアでのミーティングに参加したズニは、現状の作品アイデアを共有しました。それは、ワークショップを元にして、新作のパフォーマンスを作ることでした。

ヤンゴンに戻り、ズニは早速行動します。ミャンマーにおける若い世代とともにワークショップを行いたいと考え、ヤンゴンを拠点に活動するトゥクマ・カイーデ・シアター（以下、TKT）¹の演出家のティラ・ミンと俳優のソウ・モウ・トゥに協働を依頼します。TKTは地域コミュニティと様々な活動をしており、地域住民との演劇トレーニングや多様な民族の人たちとの演劇ワークショップを実践する団体です。ズニは自身の関心をTKTのメンバーにシェアし、若者たちが死や死後の世界をどう考えているかという点をコンセプトの主軸にして、18~25歳の若者とのワークショップを企画しました。コロナ禍、そしてミャンマー国内の危機によって、ミャンマーの若者たちの前には「死」という存在が急に立ち現れてきました。そのような状況の中で、若い人々はいま、未来だけではなく、死や死後の世界をどう捉えているのだろうか。

ワークショップのファシリテーションは、ズニとソウ・モウ・トゥ、パフォーマーのニヤン・ジーが担いました。参加型のシアターエクササイズ、ドラマ、ゲーム、ストーリーテリング、質問、パフォーマンスなど、様々なアクティビティを行い、記録映像と参加者のフィードバックをまとめます。それをもとに、ティラ・ミンが台本に起こしていきました。

2022年10月。ヤンゴンで『လျှပ်းဘီးရာများ 較』の上演が行われました。観客は円状に座り、その輪のうち約半数がワークショップの参加者です。銅鑼の音が鳴ると、ござにくるまれた4人の死体（パフォーマー）が動き出し、彼らは互いのそれぞれの行いに対して観客に問いかれます。質問のたびに観客が白か黒の紙を投票するというフォーラム形式で上演は進行してきました。これは日本の『テラ 京都編』とタイの『TERA ឥឡូវ (テラ・テラ)』の108の質問のパートからもアイデアをもらっているといいます。パフォーマーは、観客に何度も語りかけます。「観客の皆様、選んでください。彼はどこに行くのでしょうか。白か黒か。どこへ辿り着きますか？」

こうして『テラ ミャンマー』は当初の想定とは全く異なる、しかし生と死のエッセンスを持った新たな



公演ビジュアル



上演のようす。観客が投票した白と黒の紙は、壇から出してパフォーマーが数えていく

『လူည်းဘိုးရာများ 轍』という作品に変異して誕生しました。ズニがテラジアのメンバーに『轍』のアイデアを共有したのは9月のこと。その1ヶ月後には上演にまでたどり着き、さらに翌月のオンライン+オンラインイベントでは記録映像の上映とディスカッションを実施しています。この脅威のスピードと実行力には驚かされることでしょう。ズニはこの一連のプロジェクトを振り返り、こう語っています。

「テラに興味を持ったのは死がメインコンセプトにあったからで、当初予定していたパフォーマンスも葬儀や死後の世界にフォーカスしたものでした。でもこれまでのプロセスを経て、『死』について考えたり語ったりするには、『生』をちゃんと考えなくてはいけないと思うようになりました。死について考えるには、『生が何なのか』というエッセンスが大事だと。それは自分の中の変化と言えるかもしれません。」(ズニ)

(テラジア アーティストインタビュー vol.5より)

¹ Thukhuma Khayethe Theater。演劇やパフォーマンスアートを中心に、市民の社会参画とコミュニティ参加を促す劇団として、ヤンゴンを拠点に国内外で活動している。トウクマは芸術、カイーダーは旅人を意味する。



『လူည်းဘိုးရာများ 轍』

[ワークショップ] 2022年10月1日 Authentique Art Gallery

[上演] 2022年10月20日 ゲーテ・インスティトゥート・ミャンマー 講堂

プロデューサー：ズン・エイ・ビュー、ソウ・モウ・トゥ 演出・ドラマトウルク：ティラ・ミン

ワークショップ・ファシリテーター：ズン・エイ・ビュー、ニヤン・ジー

出演：ソウ・モウ・トゥ、ニヤン・ジー、スー・ミヤツ・ノウ・ウー、ズイン・ビエー・ビエー・ビヨー

ワークショップ参加者：ヤンゴンの 18 ~ 25 歳

記憶とルーツに潜る旅

ベトナム・ランソンリサーチ

2022

オンラインプレゼンテーションをきっかけにテラジアに参画したベトナムチーム。その中心となるのは映像アーティスト／インディペンデント・アート・プロデューサーのグエン・ハイ・イエン（以下、レッド）です。ここではレッドたちの動きを見てみましょう。

2021年にテラジアに参画したレッドは、当初、『テラ ベトナム』を構想していました。埋葬を始めとした葬儀の考察をテーマに、『テラ』のコンセプトに則り、サイトスペシフィックな作品として寺で上演することを計画していました。レッドはまずベトナム中部のダナン市にある寺を訪れ、その調査の旅を2021年のオンラインウイークにて経過報告しています。しかしその後2021年7月に、ホーチミン市を初めとして、新型コロナウイルス感染症拡大防止のためロックダウンが開始されました。2週間の期間で開始したロックダウンは、延長を重ねて9月末まで約3ヶ月間にわたり継続されます。市民生活や企業活動に対し強い行動制限がかかり、無論、レッドのリサーチや創作活動も停滞してしまいます。

レッドと、ドラマトウルクを担うマホは、そこからオンラインに切り替えてリサーチを行うことにしました。マホがレッドに共有したのは、日本に住むとあるベトナム人技能実習生の孤立出産（死産となり、その実習生は逮捕されてしまった）の記事。山の麓のみかん農園で働いていたその女性についての記事を読みながら、レッドとマホはやりとりを進めました。そしてようやくベトナムへの渡航が可能となった頃、マホはレッドに会いに向かいます。

2022年9月、レッドとマホはベトナム東北部のランソン省へ足を運びました。ランソンはレッドの故郷。豊かな自然があり、民間伝承の文化も顕著な特徴です。二人は、先に述べた技能実習生の話を踏まえ、ランソンの街から少し離れたみかん畑を訪れました。地面の石が苔に覆われ、収穫時期よりも早い季節のため、小さく緑のみかんたちが畑を埋め尽くしています。山で起る生と死について。自由でありながらも不安定で危うい生活。そういうたテーマに思考をめぐらせます。

二人はそのほかにも、「Phuong Hoang Cave（不死鳥の洞窟）」という名の壮大な洞窟や、街なかの寺に付随する小さな洞窟「双仙洞」（祭壇や岩壁に彫られた仏像などがある）なども見学しました。ランソンの中心にある公園では少数民族のタイ一族とヌン族¹の人々がスリーヤルン（民族歌謡）を歌っている場面に遭遇。50組ほどの人がハミングのような歌声で歌い、音が重なりあう独特の雰囲気のある空間に偶然出会ったといいます。

これらのリサーチを経て、レッドとマホは作品の構想を練っていきました。レッドは、2022年に配信した作品構想プレゼンテーションで、以下のように語っています。





「『テラ』のコンセプトを知った時から、原点に帰るというテーマを、自分の中で結びつけていました。ルートに戻って、子宮に戻る。なので私の故郷は、自分の原点に帰りルーツを新たに発見するのに、恰好の場所なんです。自分と縁が深い場所で。私にとってアートの創作活動は、自分の記憶を再解釈するということ。(中略) 故郷に繋がる子供の頃の記憶で死や葬儀、子供の頃に経験した儀式などに関連する記憶はたくさんあります。それが私の作品の「素材」となって、それを使い続けています。その素材が私を動かし、何かを創ろうという動機になっています。」

(テラジア オンラインウィーク2022+オンサイト『Tangerine Womb』作品構想プレゼンテーションより)

過去の記憶、リサーチで訪れた場や出会った人々、様々な要素が複層的に織り重なり作品の構想が出来上がっています。作品は、パフォーマーが場で動き、その姿をビデオ映像でとらえる映像作品『Tangerine Womb』(Tangerine=色鮮やかで皮が薄いみかん、Womb=子宮)と名付けられました。ランソンの風景やみかん畑を背景に、記憶やルーツに潜っていく。プロジェクトは進んでいます。

¹タイ族とヌン族はベトナムに住む少数民族で、中国国境に近い東北部山間部を主要居住地とする。タイ族は人口150万人ほど、ヌン族は96万人ほど。





各々の言葉で語られ始めるテラジア オンラインウィーク2022+オンサイト 2022

インドネシアでのミーティングから約2ヶ月後、「オンラインウィーク2022+オンサイト」が実施されました。オンライン会期は2022年11月4日～13日。その期間前後に各国それぞれがオンサイトイベントを実施します。2022年のオンラインウィークのテーマは「Transit」。インドネシアにメンバーが初めて集合した経験を踏まえ、そして翌年の「Sua TERASIA」に向けての「一時寄港地」です。オンラインのコンテンツは、前年度の経験から全て無料とし、投げ銭制を取りました。

オンラインは、これまでのテラジアの変遷を再確認するオープニングトーク「トランジット 旅の軌跡」から始まり、タイ・日本・ミャンマーそれぞれの作品アーカイブ映像を公開。そのほか、直近のインドネシア滞在リサーチの様子や、その際に制作したVR映像コンテンツなどを無料で見られるようにしました。会期中、ウェブサイトには実際に46ヶ国からのアクセスがありました。

同時に、ジャカルタのミーティングで急遽決まった各国でのオンサイトイベントも開催されます。それぞれのオンラインとオンサイトの内容を見てみましょう。



特設サイト

ミャンマー

オンライン

- 『လူည်းသီးရာမျိုး 轍』公演映像公開
- 『Masking/Unmasking Death 死をマスクする／仮面を剥がす』3Dアーカイブ公開



オンライン

- ヤンゴンのAuthentique Art Galleryでイベントを実施

各国の公演映像の上映会と、それぞれの作品を見た後に毎回ディスカッションを行った。『လူည်းသီးရာမျိုး 轍』の演出を担当したティラ・ミンと創作メンバー、そしてヤンゴンで活動するゲストアーティストを呼んでのトーク。これら全てのモデレーターをズニが務めた。



日本

オンライン

- 『テラ 京都編』オンライン配信



オンライン

- 東京の劇場PARAでの展示と上映

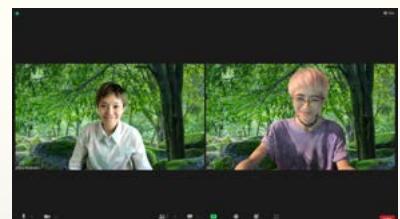
公演映像上映と、トークプログラムに力を入れて実施。
①テラアジアの変遷解説 ②インドネシア・ベトナム滞在報告
③ミャンマー・タイの活動についてゲストを交えてのトーク
④『テラ 京都編』を踏まえた詩の上演についてのトーク。
テラアジア全体を網羅する内容となった。



ベトナム

オンライン

- 『Tangerine Womb』プレゼンテーション動画
- 2022年9月のランソソリサーチを踏まえて、
進行中の作品『Tangerine Womb』について
プレゼンテーションした動画を公開。
レッドとマホが登壇した。



タイ

オンライン

- 『TERA ເຕຣະ (テラ・テラ)』 オンライン配信
- チェンマイ大学の学生向けに行った上映会とトークの記録公開
- 新作楽曲『Circle of Karma』



グリット・レカクンとトーポン・サメージャイによる新作。『TERA ເຕຣະ (テラ・テラ)』における「死」の思想を現代音楽として表現した楽曲。



- デジタル写真展『Reflection and Reinterpretation of TERA ເຕຣະ』

『TERA ເຕຣະ (テラ・テラ)』作中の様々な物語を再解釈し、静止画で再構成する独自の試み。



オンライン

- 『テラ』『テラ 京都編』『テラ・テラ』の上映会とディスカッション
- ソノコ・プロウによる身体ワークショップ、グリットとトーポンによる音楽ワークショップ
- 写真展『Reflection and Reinterpretation of TERA ເຕຣະ』



インドネシア

オンライン

● ディンドンW.S.によるオンライントーク

ディンドンが、テラジア参加の想いや創作中の作品について、そして「Sua TERASIA」に向けた展望を語ったトーク映像を公開。



オンライン

● ティアンとスギを中心にジャカルタにてイベントを実施

- ①『テラ』『TERA テラ (テラ・テラ)』『テラ 京都編』『*လျှော်းဘီးရာများ 輍*』の映像上映とトーク
- ②「旅する演劇」「死と儀式」についてのパネルディスカッション
- ③ティアンとスギによる新作パフォーマンス『Funeral Gift for Aminah Ghost』

パフォーマンスは、『テラ』の108の質問をジャカルタに移植して作品にした試みで、インドネシアの作家プラムディヤによる短編小説『ブリタ・ダリ・ケバヨラン』(「ケバヨランからの知らせ」)をモチーフに取り入れて創作された。小説に登場するアミナという人物の靈をスギが演じ、観客に質問をして答えてもらうという構成。『テラ』のエッセンスを持ちながら、植民地期と第二次大戦を経たジャカルタ(の一地域)の歴史を参照し、現在のジャカルタの人々に向けた公演となった。なお、ティアンとスギがテラジアに加わったのはオンラインイベントの数ヶ月前で、そこから企画と実施、新作まで創作するという脅威のスピードだった。



『Funeral Gift for Aminah Ghost』上演のようす。テアトル・ウタン・カユにて

オンラインでは共通コンテンツを公開しつつ、オンラインではそれぞれのチームがそれぞれの土地でコーディネートをしました。これによって1年前のオンラインウィークと大きく変化したのは、アーティストそれぞれが現地の観客と出会い、各々の言葉でテラジアを説明し、議論しているということです。もちろんそれまでもトークの機会は各アーティストが登壇していましたが、ここで特筆すべきことは、オンラインウィークの期間、同時期に、体系だってテラジアというプロジェクトを語ることができているということです(これには、ジャカルタでメンバーが直接会ったということが大きく影響しているかもしれません)。とりわけ、インドネシアのティアンとスギはテラジアに参加してから現地の観客に語るまでに4ヶ月程度しか経っていないにも関わらず、プレゼンテーションは全て各々で行っていました。それまで、主にオンライン上で語られてきたテラジアは、各アーティストの身体を通して、各々の言葉で、そして各々の観点で語られ始めたのです。

2023年7月頃。Sua TERASIAの開催に向けて、テラジアはより具体的に動き出します。ユカリ、マホ、そしてベトナムのレッドはインドネシアに向かいました。ティアンとスギとミーティングをしつつ、スギの案内で一行はジャカルタから東南に約200km離れたバンドンを初めて訪れました（スギはバンドン出身です）。Sua TERASIAは複数の土地での開催を目指しており、ジャカルタに加えバンドンも候補地として検討を始めました。

最終目標に設定されていたSua TERASIAは、もともと一度きりの大きなイベントとして構想されていました。隔離の期間が明けた頃、各国のアーティストがインドネシアで直接出会う。これこそがテラジア発足時から掲げられていた、ひとつの終着地点です。複数の会場で公演やイベントを開催しつつ、グヌン・パダンで「儀式」を行う。これらの案をまとめ、複数の助成金に申請を行います。そう、ここでも課題となったのは、資金の問題です。5か国からアーティストがインドネシアに集い、滞在し、公演を行うには、相応の予算立てが必要となります。大規模な劇場や芸術祭といった組織ではなく、コレクティブのチームで実現を目指すには、複数の芸術助成金に頼らざるを得ない状況でした。

テラジアはここで、Sua TERASIAの開催に向けてひとつの方向転換を行いました。Sua TERASIAを2回に分け実施し、その際にインドネシアに来られるメンバーで作品発表をすることにしたのです。金銭的リソースだけでは実現が難しい部分は、現地の会場との調整を行い、ボランティアスタッフをはじめとした人的サポートを得られるよう動きます。そしてグヌン・パダンでの「儀式」は、2回目のSua TERASIAで実施できるよう計画が更新されました。

テラジアでは、こういった方向転換が何度も起こっています。ここで触れておきたいのは、プロジェクトの可変性についてです。例えば公共劇場や芸術祭におけるプロジェクトの場合、多くは数年前から大々的に計画され、ファンドレイズを綿密に行い、各部署との調整に大きな時間を割きます。実現可能な計画を着実に遂行する、いわば直線的な実現性に価値を置くことで、プロジェクトが形作られていきます。他方、テラジアはもともと、パンデミックという世界規模の「想定外」から出発しています。計画を立てても思い通りには実行できない状況下、数多の非実現性に



ジャカルタにて

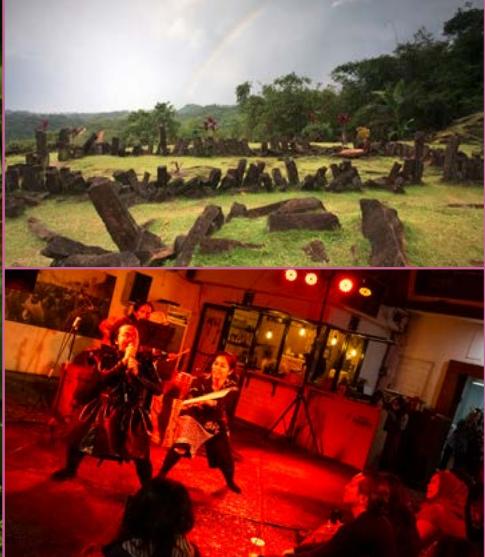
直面するたび、進路を変え、蛇行しながらプロジェクトは進んできました。ゆえにその過程では、計画の修正や延期といった選択が度々起こっています。なぜこういった極めてフレキシブルな進行が可能なのか。それは、プロジェクトの主体がコレクティブであることが一因かもしれません。テラジアは、作品上演を目的として一定の期間契約を結ぶ集団ではなく、プロジェクトの持つコンセプトや作品、アイデアに共鳴して集う任意のチームです。それゆえに、創意工夫が必要な場面ではメンバー同士で話し合い、企画の方針転換が積極的に行われています。また、それぞれが普段からアーティストやプロデューサーとして活動しているので、個々の作品については自分達でスケジュールや計画の調整を行えます。そして、国によって情勢や状況は異なるため、テラジア全体で足並みを無理に揃えようとはしていません。各々が、今やるべきこと、やりたいこと。自分の立場で、今しかできないことは何か。あるいは別の機会に違う形でできることは何か。その時々に応じて問い合わせ、最適な形を探るのです。その結果、思いがけず誰も想像していなかった全く新しい作品や企画、すなわち「想定外」が次々に実現していくこともあるのです（2022年のオンラインサイトイベントや、のちのSua TERASIAでの作品などがその例でしょう）。

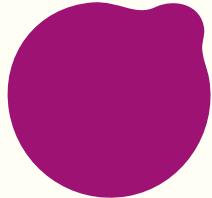
これは、大規模な興行や芸術祭においては取り難い運営方法でしょう。綿密に計画し、実現可能性の高いものを確実に実行する。そこでは「想定外」は障害です。しかしテラジアにおいては、「想定外」を出発点にした可変性こそが、プロジェクトの重要な性質なのです。「作品が国境を超えて変異する」というのは初期にゴップが提案した言葉ですが、数年の活動を経て、テラジアはプロジェクトの在り方そのものが可変的になっているように見受けられます。

さて、話を元に戻しましょう。Sua TERASIAは、Episode 1・Episode 2と分割して実施することが決定しました。Episode 1は2024年1月に開催。スケジュールや情勢的な事情も踏まえ、タイ・インドネシア・日本のアーティストが集合することに。タイからは『TERA たり (テラ・テラ)』チーム一同（ゴップ、ソノコ・プロウ、グラム・タム、グリット・レカクン、トーボン・サメージャイ）が参加。日本からはユカリ、マホ、制作にインドネシアのアーティストとの協働経験も深い戸田史子を迎えてインドネシアへ向かいます。インドネシア現地ではスギ、ラウエ、ティアン、ディンドンらが集まり開催の準備を進めていました。ついに「Sua」するテラジア。続きをていきましょう。



チアンジュールにて。のちに Sua TERASIA Episode 2 の会場の一つとなった Kilometer95 Kopi を訪ねた





TERASIA

2024-2025

Sua TERASIAへ

—隔離の時代の終わりとその先へ—

出会う Sua TERASIA Episode 1

次のSuaへ種をまく

再び出会う Sua TERASIA Episode 2

終わりと始まりの儀式



出会う Sua TERASIA Episode 1

2024

Sua TERASIAのプログラムは以下の3つの柱に分かれています。



1.創造と発表のステージ

テラジア作品の上演・上映・展示。また、テラジアのアーティストらが、それぞれの制作技術や思想を共有し、現地の参加者と交流するワークショップを行う。

2.思考と対話のテーブル

テラジアは、ポスト・コロナの演劇やアートに何をもたらしたのか。国境を超えた創造的なネットワークをいかに持続させるか。アジアの歴史と現在において、芸術・宗教・信仰・儀礼の相互関係はどう捉えられるのか。多分野を横断するシンポジウムで、様々な背景のスピーカーと共に考える。

3.終わりと始まりの儀式

グヌン・バダン古代遺跡の頂で、太陽と月が出会う晩、「隔離の時代」の終わりと新たな始まりを迎える儀式を行う。※ Episode 2にて開催

これらの構成は2022年のオンラインウィーク+オンサイトで公開したものです。これに則り準備が進められています。開催地はジャカルタとバンدون。2024年1月12日から20日にかけて開催されました。



(上) バンドン / ISBI にて。学生や教員たちが観劇 (中央左) バンドン / スラサー・スナルヨ・アートスペース。観客の目の前でパフォーマンス (中央右) ジャカルタ / テアトル・クプールでの公演。子どもたちがたくさん (下) ジャカルタ / コムニタス・ウタン・カユでの観客たち

『テラ ジャカルタ編／バンドン編』

2024年1月12日～13日 インドネシア／ジャカルタ コムニタス・ウタン・カユ、テアトル・クプール

1月17日、19日 インドネシア／バンドン インドネシア芸術文化大学 (ISBI) バンドン校、スラサー・スナルヨ・アートスペース

演出：坂田ゆかり 出演：スギヤンティ・アリアニ 音楽：ラウェ・サマガハ ドラマトゥルク：渡辺真帆 特別出演：霧河太樹

通訳・翻訳：横須賀智美、ディア・アユ・クスマワルダニ 翻訳監修：アンドリ・ヌル・ラティフ

●『テラ ジャカルタ編／バンドン編』

オープニングパフォーマンスを担ったのは、『テラ ジャカルタ編／バンドン編』です。日本版『テラ』を元に、インドネシア版の新作を創作。主人公・京極光子をスギが演じ、音楽はラウェが担当。演出はユカリ、ドラマトゥルクはマホが担い、日本版『テラ』のテキストを参照しながらも、現地に合わせて大きく編集されて、国をまたいだ新しいコラボレーションが実現しました。スギが観客に語りかけ、詩を読み、次々と衣装を変え歌い上げ、その横でラウェがさまざまな自作楽器で音を響かせます。特別出演として、日本から参加した僧侶の靈河太樹が日本仏教について話をし、読経を行いました。108の質問を投げかけられた観客たちは、音とテキストが共鳴した空間でリラックスした様子で木魚を鳴らしていました。自身の内面と静かに向き合うような時間も生まれ、これまでの『テラ』とはまた異なった雰囲気をまとめて誕生した『テラ ジャカルタ編／バンドン編』。ジャカルタとバンドン、2都市4会場でパフォーマンスが行われ、多様な観客層に迎え入れられました。

●『TERA ケラ（テラ・テラ）』

タイチームは3年の時を経て、バンドンで『TERA ケラ（テラ・テラ）』を再演。演出をゴップ、主演をソノコ・プロウとグラム・タム（ドラマトゥルクを兼任）、音楽をグリット・レカケンとトーポン・サメージャイと、初演の創作メンバーが全員で参加。タイ語上演にインドネシア語・英語字幕を付け、スラサール・スナルヨ・アートスペースという屋外の会場で実施しました。バーラート寺院（チェンマイ）に合わせて作られていた演出を、スラサール・スナルヨの環境に合わせて調整を行います。カフェスペース、円形劇場、小屋の縁側、東屋と、観客を連れて移動しながら、『TERA ケラ（テラ・テラ）』の物語が進行していきました。作品中には、インドネシアのジョグジャカルタ郊外にあるボロブドゥール寺院を設定として引用。ゴップらのリサーチにより、インドネシアにおける仏教の文脈が作品に取り入れられました。アフタートークでは、観客から積極的な質問が飛び交います。生と死について個々人の観点を踏まえて話し合われ、白熱した時間が生まれました。

●ワークショップ『死の体験旅行』

ワークショップでは日本から僧侶の靈河太樹が参加し『死の体験旅行』を実施。死について自分の願望や内面に向き合い、死へのプロセスを参加者それぞれが言葉にしていくという経験を提供しました。

また、各会場では、テラジアについての説明展示、タイチームが2022年に制作した『Reflection and Reinterpretation of TERA ケラ』の写真展、2022年のインドネシアリサーチ時に制作したVRコンテンツ『竹生誕』、2021年に行ったカミズの『Masking/Unmasking Death』展の3Dアーカイブなど、これまで制作されたコンテンツも、観客が会場で鑑賞できるように公開されました。

「隔離の時代」が始まった2020年から、ちょうど4年。その隔離の時代が終わるとき、インドネシアで出会い、作品を作り観客へ届ける。テラジアが発足当初から描いてきたこのビジョンはついに現実のものとなったのです。



『TERA テラ (テラ・テラ)』 上演のようす。環境を取り入れたサイトスペシフィックな演出をほどこした

『TERA テラ (テラ・テラ)』 2024年1月19日～20日 インドネシア／バンドン スラサール・スナルヨ・アートスペース

演出：ナルモン・タマブルックサー 出演：ソノコ・プロウ、グラム・タム 音楽：グリット・レカケン、トーボン・サメージャイ

ドラマトゥルク：ソムワン・ゲオスファン博士、グラム・タム テクニカルスタッフ：パンチャナサック・ニティウェチャケン

ステージマネジメント：オーガスト・セルケ 翻訳：ディア・アユ・クスマワルダニ 英語編集：オーガスト・セルケ



ワークショップのようす

ワークショップ『死の体験旅行』

2024年1月14日 インドネシア／ジャカルタ コムニタス・ウタン・カユ - Teater 2024年1月18日 インドネシア／バンドン ISBI バンドン校

講師：靈河太樹 通訳：横須賀智美 翻訳監修：アンドリ・ヌル・ラティフ

Sua TERASIAの柱のひとつ、「思考と対話のテーブル」においては、以下の3つのラウンドテーブルが開催されました。テラジアが進む中で発生したいくつものキーワードを元に、ゲストとともに複数の観点から話し合われます。



●「遠隔協働とサイトスペシフィックなアート実践」

テラジアという《遠隔》かつ《サイトスペシフィック》なコレクティブの実践を、マホ、ゴップ、ティアンと、ジャカルタを拠点に活動するアーティスト、イルワン・アーメットの双方の視点から具体的に概観。インドネシア各地に点在する多文化のアート・コミュニティにおいて、これらの遠隔協働のネットワークと経験を活用する可能性についても議論が及びました。



●「ポスト・パンデミックの芸術とトランスナショナルなエコシステム」

既存のスキームにとらわれず、未来の創造を支えるエコシステムとはどのようなものか、共に考える場として開催。前半は「国際芸術祭」や「ワールドツアーアート」という上演／発表形態を改めて見直し、それらを成立させてきたエコシステムについて。後半は、トランスナショナルなコレクティブを持続可能な形で発展させる新しいアイデアについての議論。日本からドラマトゥルクの長島確、ジャカルタを拠点に活動するアーティストのヨラ・ユルフィアンティ、演出家でありジョグジャカルタのテアター・ガラシの共同創設者 ユディ・アフマド・タジュディンを交えて意見交換が行われました。



●「Sua TERASIAのためのオープンディスカッション」

ISBI（インドネシア芸術文化大学）バンドン校にて行われたオープンディスカッション。学長のレトノ・ドウェマルワティ博士、演劇学科長のファスル・アンショリ、長島確が登壇。学生、教員、一般参加者とともに、テラジアの実践や発想を共有しながら、自由な対話が行われました。

これら一連のディスカッションは、最終地「Sua TERASIA Episode 2」への種まきのような時間でもありました。テラジアメンバーだけでなく、他のアーティストや実践者、研究者、大学などと連携し、複層的な角度からテラジアというプロジェクトを捉え直すことで、次の議論の種やテーマを見つけていきます。

●『儀式のタベ』

もうひとつのパフォーマンスにも触れておきましょう。ジャカルタで実施した『儀式のタベ』です。ディンドンを主導に実施されたこのパフォーマンスは、タイとインドネシアのアーティストが行った、儀式的な即興セッションです。アーティスト、ゲスト、コミュニティメンバーなど様々な参加者が一堂に会し、約1時間のセッションの時間を過ごします。最初はアーティストがそれぞれの儀式（演奏、踊り、語りなど）を行い、次第に参加者もその中に溶け込んでいく。音や身体を使いながら、各々のスピリチュアルな感性に従ってひとつの空間と時間を過ごしました。

このセッションは次のグヌン・バダンでの儀式に向けたひとつの実践だったと言えるかもしれません。タイ、日本、インドネシア、それぞれの出自を持つ人々にとって《スピリチュアルなもの》との距離感は全く異なります。一方で、テラジアのプロジェクトにおいては、生と死を含めた、形のないスピリチュアルな観点は切り離すことのできない本質的な要素だと言えるでしょう。『儀式のタベ』に参加したアーティストたちは、共通して「尊重」「コンタクト、コネクト（つなぐ）」というキーワードを口にしました。音楽家のラウェによると、鑑賞すること・観ることをインドネシア語では「tonton」と言い、一緒に参加することで人生の指針を得ていくことを「tuntunan」（手引きになるもの／手引きとして一緒に見ていくものという意もある）と言うそうです。『儀式のタベ』で参加者たちが経験したのは、「tontonではなく、tuntunanすること」とラウェは言います。一方的にただ観るのではなく、ともに在り一緒に観て、参加すること。それぞれのスピリチュアリティは異なっていても、そのひとつの場を共有すること。このセッションは、そんな時間だったのでしょう。

そしてこの『儀式のタベ』はひとつの問いかけでもありました。

「私たちの身体のなかには、まだスピリチュアルな《何か》があるのだろうか？」

この問いは、Episode 2、グヌン・バダンでの「儀式」へつながっていくのです。



『儀式のタベ』のようす。アーティストたちが各々のパフォーマンスを行い、次第に観客も会場の真ん中へ出てそれぞれに参加する

『儀式のタベ』

2024年1月14日

インドネシア / ジャカルタ コムニタス・ウタン・カユ - Teater

ホスト：ディンドン W.S. ミュージシャン：グリット・レカウン、トーポン・サメージャイ、ラウェ・サマガハ ほか

パフォーマー：ソノコ・ブロウ、テアトル・クブル ほか



再び出会う Sua TERASIA Episode 2 2025.

Sua TERASIA Episode 1を終えた7ヶ月後の2024年8月。ユカリと、制作の戸田史子が再びジャカルタを訪れました。ティアン、スキ、ラウェと会い、最後に持ち越されているグヌン・バダンでの「儀式」を含めたSua TERASIA Episode 2に向けて、準備と調整を行います。グヌン・バダンおよび隣接するチアンジュールは、かつてのスンダ王国¹から続く歴史と文化の影響が色濃く残っています。現地の施設や人々とのコネクター（仲介役）として、チアンジュールを拠点とするアーティストのファイサルも合流し、またマネージメント担当のターシャも加わり、皆でジャカルタに集合しました。Episode 2はチアンジュールでの開催、そしてグヌン・バダン²にフォーカスすることが決まります。

さらに2ヶ月後、ユカリはディンドンと一緒に、会場下見も兼ねてチアンジュールを訪れます。ディンドンはワークショップを計画していました。土地の歴史を知り、地元の人々に会い、協力を仰ぎます。Episode 2では、ズニ、演出家のティラ・ミンを始めとしたミャンマーチーム、『テラ』出演者の稻継美保ら日本チームがチアンジュールにやってくることに。各々のコンテンツを持ち寄りつつ、内容の細かい調整は現地で行うべきことが多く、準備は直前まで続きました。

そして2025年1月10日から19日にかけて、Sua TERASIA Episode 2がチアンジュールで開催されました。オープニングはチアンジュール駅からすぐのカフェ、Kilometer 95 Kopiにて。テラジアの紹介プレゼンテーションと展示、そしてチアンジュールの伝統音楽パフォーマンスから始まりました。以下に、各コンテンツを紹介しましょう。

¹スンダ王国は669年頃に成立し1579年頃まで続いたヒンドゥー教の王国で、現在のインドネシア・ジャワ島西部に存在した。現在のチアンジュール市がある西ジャワ州には多くの歴史的遺跡が残っている。

²グヌン・バダン遺跡は、チアンジュール市内から車で約1時間半、グヌン・バダン村の海拔約885mの地点に位置する。1914年にオランダ人の歴史家ニコラス・ヨハネス・クロムによって最初に報告された。最上部の大きな石を頂点に5つの段丘からなるピラミッド型の巨石遺跡で、遺跡の総面積は約3ヘクタール、東南アジア最大である。スンダ王国の一つであるバジャジャランの王・シリワンギ王が導きを得るための苦行の際に立ち寄った場所とも言い伝えられるが、いまだ謎が多く、現在も調査が進められている。



上演のようす。背景に AI による映像が投影された

●『Death is Something Visual』

『Death is Something Visual』はスギが声がけをしたバンドンチームによる新作のワーク・イン・プログレスです。Episode 1の会場の一つであったISBI（インドネシア芸術文化大学）バンドン校で教鞭を取る俳優のトニー・プロア、そしてワイルを中心に、新たなパフォーマンス作品を創作し、Kilometer 95 Kopiにて発表されました。Episode 1で行われた『TERA テラ (テラ・テラ)』のアフタートークにて、彼らから「自分たちの『テラ』を作りたい」という言葉が出たのは約1年前のこと。死や問答といったテーマを含めて作品構想を少しずつ練っていました。そしてEpisode 2の開催直前に、バンドンチームは作品を形にすることを決意。「死は本質的に視覚的なものである」という推察をもとに、生成AIを活用した上演を実施しました。作品では、インドネシアのいくつかの伝統における、視覚的な表現によって祖先を偲ぶ行為に注目しました。例えばスラウェシ島に住むトラジャ族の「マ・ネネ³」の伝統では、死後、遺体は着飾られ、ある種の神秘的なアプローチを経て、「最後の安息の地」へと向かうために「生き返る」段階があります。死が人生の一段階と捉える考え方、そしてそれが生者とのつながりでもあるという点にスギたちは着目し、現代の視覚的伝統、とりわけアニメの実践を踏まえて作品を制作しました。パフォーマンスでは、生成AIとモーションキャプチャを駆使し、ワイルの舞踏の動きをカメラが捉えると、生成AIが画像を抽出し、リアルタイムで映像として投影されます。生成AIによって、東洋と西洋の神仏や天使などの無数のイメージが滑らかに遷移し、現実の映像とリアルタイムで合成されました。生と死のエッセンスを携え、生身の身体とAIによる映像が交わり合う、複層的かつ神秘的なパフォーマンスが披露されました。

³先祖の魂をたたえるため、ミイラ化した親族の遺体を墓から取り出して清め、供え物をささげる儀式。マ・ネネは通常、夏に行われ、遺体が納まる柩は山の中腹に掘られた埋葬窟から取り出される。

『Death is Something Visual』

2025年1月11日

インドネシア / チアンジュール Kilometer 95 Kopi

イニシアーター（発起人）：スギヤンティ・アリアニ

ドラマツルギー：アクバル・ユムニ

コラボレーション：トニー・プロア、フィッキィ・モノ、D.ブルキニ、モ・ワイル

芸術チーム：アジ・サンイアジ、イバン、ジャファル、ロフマット





ワークショップのようす。編み物をつなげていく

●『シアターM』

日本から参加した稻継美保は、1歳の娘とともに小さな劇場『シアターM』をオープンするプロジェクトを展開しました。Cianjur Creative Center (CCC) というアートセンターを拠点とし、約1週間にわたって様々なワークショップが次々に行われました。創作のパートナー曾根千智とともに、参加者の「これをやってみたい」という表現や小さな欲求を実現していきます。イスラム教徒による編み物のワークショップでは、現地の人々と編み物を作り、最終的には「隔離の時代」の終わりを象徴するような一枚の大きな「つながり」の布が完成しました。パレスチナ・ガザ地区の平和を願う凧づくりのワークショップのホストとなったMは、パレスチナの情報をシェアし語り合う会も開きました。また、日本から参加した中鉢夏樹は、化石燃料とその船舶輸送による世界的な危機をテーマに、日本の流しそうめん（割った竹に水と麺を流し、麺を掬って食べる方法）のパーティを開催。ラウェは竹を用いてオリジナル楽器を制作するワークショップを行い、最後に参加者や子どもたちとともに演奏をして、1週間の『シアターM』は幕を閉じました。これらの複数のゆるやかなワークショップの場を稻継美保と娘がホストとなってひらき、開催中は地元住民や子どもたちが自由に入り出していました。



凧づくりの風景



流しそうめんを囲む



楽器づくりを子どもたちと

『シアターM』

2025年1月11日～18日 インドネシア / チアンジュール Cianjur Creative Center, Kilometer 95 Kopi

シアターM ホスト：稻継美保&ミリ 創作のパートナー：曾根千智

ワークショップ『Kites for Gaza』ディスカッション『パレスチナについて話そう』ホスト:M、ワークショップ『Rajut Together』アーティスト:愛麻、

ワークショップ『流しそうめんパーティー』アーティスト:中鉢夏樹、ワークショップ『竹から楽器をつくる』アーティスト:ラウェ・サマガハ、稻継美保



上演のようす。国をまたいでクリエイションが実現した

●『လှည်းဘီးရာများ 轍』

ミヤンマーチームは、2022年に制作した『လှည်းဘီးရာများ 轍 (Markings of the Cartwheel)』を上演。ズニ、演出のティラ・ミン、俳優のソウ・モウ・トゥがチアンジュール入りし、インドネシアのパフォーマー、リフカを新たに加えてのパフォーマンスを行いました。ソウ・モウ・トゥが英語、リフカがインドネシア語でパフォーマンスを行いつつ、観客たちが理解しやすいようフィジカルを中心とした演出にアップデートされました。

『လှည်းဘီးရာများ 轍』

2025年1月17日～18日

インドネシア / チアンジュール Cianjur Creative Center

プロデューサー：ズン・エイ・ビュー 演出：ティラ・ミン 出演：ソウ・モウ・トゥ、リフカ



展示のようす。新たに作られた蓮のオブジェクトたち

●『マスクする/仮面を剥がす：あいだの旅』

カミズによるマスクの展示『マスクする/仮面を剥がす：あいだの旅』も同時に開催されました。2021年に東京で展示されたマスクは、2022年にキュレーターの居原田遙の企画によって京都で展示され、しばらくの間日本で保管されていましたが、この機会にチアンジュールへと輸送されインドネシア初の展示に至りました。チアンジュールでの展示は、それまでの展示形式を踏襲しつつ、湖に変わって白い蓮のオブジェクトが置かれるなどアップデートが加えられました。濁った池の底から生え、美しい白い花びらを咲かせる蓮。困難を乗り越え回復していく人生のメタファーとして用いられ、白い紙で折り紙のように作られています。テラジアメンバーも蓮をひとつずつ作成して会場の中心に設置し、蓮の付近にはコインが散りばめられました（ミャンマーの仏教における慣習で、故人の口に来世への旅立ちを祈る象徴として硬貨が入れられる）。「あいだの旅 (The Journey in Between)」と冠された展示のタイトルは、生と死の複雑なつながり、そのあわいを探求する旅に出かけ、私たちの存在をより深く理解するという展示意図を表したものですが、かつ、このチアンジュールでの展示は次の展示に向けた旅のステップでもあるのです。軍事クーデター以降、カミズがマスクを作り始めた2021年から4年の歳月が経過した2025年現在、マスクはジャカルタで保管され、展示される時を待っています。マスクの旅はこれからも、まだまだ続くことでしょう。

『マスクする / 仮面を剥がす：あいだの旅』

2025年1月16日～19日 インドネシア / チアンジュール Cianjur Creative Center

キュレーター：居原田遙 アーティスト：カミズ



ワークショップのようす

●『シアター・クリエイター・ワークショップ—歴史をつくる3日間の特別な旅』

ディンドンは、3日間にわたるワークショップを実施。ディンドンが自身の持つワークショップの手法を用いながら、チアンジュールの俳優志望者や演技に興味のある若者たちを対象に開催しました。チアンジュール市の中心にある歴史的建造物 Bumi Ageung。チアンジュールにおける独立闘争の重要な拠点となったこの場所は、歴史を語る写真や品々が保管されており、市の文化遺産となっています。この場から得た洞察をもとに、街の歴史をたどるアーカイブ、コレクション、記憶の探求に焦点を当てたワークショップを行いました。

『シアタークリエイター・ワークショップ—歴史を作る3日間の特別な旅—』

2025年1月11日～13日 インドネシア / チアンジュール Bumi Ageung, Dewan Kesenian Cianjur

ファシリテーター：ディンドン W.S. コーディネーター：ファイサル・シャレザ

Episode 1に続き、チアンジュールでも語りの場・ラウンドテーブルを実施。以下の3本立てで行われました。



●「テラ/アジアにおけるトランスナショナルな協働創作 とその未来」

アーティストが国境を越えてコラボレーションをするにはどうすれば良いのか。アジアのアートシーンにおいて、共創のための技術や方法論をそれぞれの経験を通じて培ってきた登壇者たちによる議論。ディンドン、日本のドラマトゥルク・翻訳家の滝口健、ズニと演出家のティラ・ミン、モダレーターにティアンが登壇し、それぞれの背景や経験を踏まえて語り合いました。



●「儀式、信仰、スピリチュアリティと芸術」

異なる文化的・社会的文脈における、儀式、信仰、スピリチュアリティ、芸術の関係性を探るラウンドテーブル。それぞれの要素は互いにどのように影響し合っているのか、また、スピリチュアルな体験は、どのような役割を果たしているのか。登壇者による洞察が示されました。マホによるファシリテーションのもと、ラウェ、ズニ、そしてチアンジュールのコミュニティ・オーガナイザーであるスヘンディを迎えて実施。



●「混ざり合う、「ネアンガン・バトゥール」(友を探す)」

Sua TERASIAを通じて紡がれてきた関係を再考し、これらのつながりが今後どのように進化していくのかを探るディスカッション。ファイサルがモダレーターを務め、オープンディスカッションの形式をとり、誰でも発言可能な場として開かれました。「Neangan Batur (ネアンガン・バトゥール)」という表現は友人を探すという意味で、テラジアコレクティブのメンバーやチアンジュール制作チームが参加しました。

Episode 2では、テラジアの経験、そしてSua TERASIAを総合的に振り返り、いかにして国際的な協力ネットワークを維持するか、アジアにおける芸術、宗教、信仰、儀式といった複雑に絡み合った関係をどのように理解すればよいのか、といった根本的な問いに立ち戻る議論が展開されました。

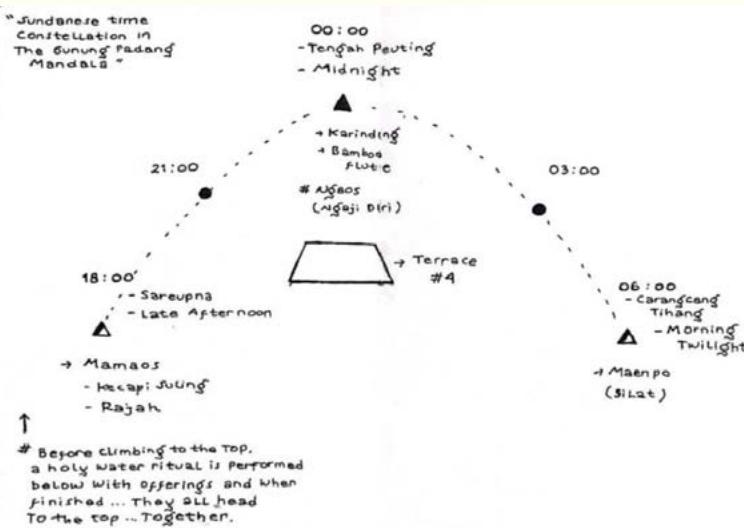
Sua TERASIAにおける最大のイベントは、満月の夜、グヌン・バダン古代遺跡に登り、儀式を行うこと。2020年に立ち上がったテラジアが目指してきた地点に、ついにたどり着きます。

グヌン・バダンでの儀式を最初に企てたのは、ディンドンでした。2021年、オンラインウィークのクロージングトークで、その構想を語っていたことは先に述べた通りです。「隔離の時代」が終わったころ、国境を越えてメンバーが一堂に会し、グヌン・バダンで儀式を行う。その時がやって来たのです。

儀式は、観客に見せることを主とした興行とは少し異なります。テラジアというひとつのコミュニティ、ひとつのプロジェクトに集った人々が、共通の体験をし、同じ時間を過ごす。プロセスを共有しながら、各々の、人間の内面に向き合う。テラジアがこれまでさまざまな作品や企画で問い合わせてきた、「私たちは何者か」「何を信じ、どこに向かうのか」という問いを携えた、ひとつの実践です。そして、2024年のSua TERASIA Episode 1『儀式のタベ』で問い合わせられていた、この言葉の先を探しにいく旅でもあると言えるでしょう。

「私たちの身体のなかには、まだスピリチュアルな《何か》があるのだろうか？」

グヌン・バダンでの儀式は、ディンドン発案のもと、構成はラウェを中心に検討され、ティアンらとチアンジュー制作チームがサポートしました。満月の日は1月14日。月の光が降り注ぐその晩に、その場にしか立ち現れない瞬間を体験するためにみんなで山を登ります。



ラウェによるイメージ図と進行図

2025年1月14日。遺跡のある山のふもとに参加者が集まりました。テラジアのアーティストたち、チアンジューの制作チーム、地元の参加者など、20名ほど。まずは夕方、ズニによるメディテーションワークショップから始まります。五感をひらく瞑想の時間を経て、少しずつ山を登り始めました。道中、それぞれ道端にある気になるものを集めながら進むようガイドがあり、参加者の手には落ち葉や石などが握られていきます。山頂に着いたころ、数名のグループに分かれ、それぞれが持っていたものを集め、祈りのためのアイコンを作りました。そして一連のワークショップの後、ラウェと地元の音楽家らが伝統楽器を用いてスンダ音楽を演奏します。ラウェは参加者に、「それぞれの方法で祈って」と声をかけたのでした。

そして夜。みんなで儀式のための食事をし、語らい、寝たり休んだりしながら、月が出るのを待つのです。この日は雨が降り続き、肌寒い空気。各々の時間を過ごします。夜中の3~4時頃、雨は見事に止み、大きな満月が雲間から顔をのぞかせました。「月が出た出た」とお互いを起こし合って、空を見上げます。薄い月の光の下にみんなで集まり、再び音楽を奏で、瞑想を行う。そうやって夜を明かします。そして午前6時頃。朝靄の中、山を降りて儀式は終わりました。



これら一連の時間はいったいどのような経験だったのでしょうか。おそらく、体験者ひとりひとりによって、その一晩の経験とそこで得た感覚は異なるものでしょう。ここでは、実際に儀式に参加した登頂者、それぞれの言葉を紹介します。

グヌン・パダンでの体験は、自分自身の内側にある何かと触れ合う旅のようなものだった。自らの存在を認めることでもあり、心地よさと受容の感覚が私たちに新たな意欲を与えてくれた。

(ファイサル・シャレザ)

巨石の真ん中に座り、心地よい音楽の音に耳を傾けていると、まるで別の世界に連れて行かれたような気がした。しかしある瞬間、すべてがとても静かになり、外界の音が消えたような気がした。その静寂の中で、私は実に多くのことを考えていた。人生について、自分自身について、そして世界との関係について考えるきっかけとなった経験だった。

(リフカ)

私は誰なのか、あなたは誰なのか、そしてこの世界で私たちは誰なのか…そんなことをより強く意識するようになった。

(フェラ・ユリア)

儀式の中で、私は自分の外側の部分に触れることができただけでなく、自分の最も深い部分に気づくことさえできた。今まで無視していた部分だ。

(エドワル・マウラナ)



儀式を行うとき、自己と自然の中で心のバランスをとることができれば、それは深い内省となる。静けさと自分自身への受け入れ、深い内省の新たな感覚は、いつも内側に束縛されている不安を取り除き、平穏の世界に入っていくような感じがする。

(スラエマン)



人間、自然、そして神はひとつであるということを、
より確信できるようになった。

(イクバル・エキ・スグラハ)

グヌン・パダンでの滞在中、私はTERAや宗教的実践の場を作り出しているものは何だろうと考えていた。それは私たちが、共有し、理解し、祈るために場を集団で作り上げていると感じたからだ。月の下での儀式だけではなく（そう、一日の終わりに月があったのは最高だった！）、ロッジでの何気ない会話を通してでもあった。グループ内の信頼と寛容が、この経験全体を私たち自身のTERAに変えたのだ。

(滝口健)

内省のひとときだった。静かで、温かく、有意義な時間であり、特に友人たちと支え合いながら過ごしたことが、その価値をより一層高めてくれた。儀式の間は、人々をひとつにつなぐことのできる文化に対する、感謝と畏敬の気持ちが湧き上がった。ゆっくりと内なる空間が開かれるような安らぎがあった。このような集まりを通して文化が生き続けることができるという希望で心が満たされた。

(デフィナ)

雨が上がり月が見えた夜中に、月の光を受けて身体が温かく感じたのが印象的だった。成果を共有するのではなく、一緒にいる時間をどう感じ合うかを共有することの尊さを思った。全ての感覚をよく観察して統合する大切さを意識するようになった。

(曾根千智)

地元の文化をたくさん学ぶことができた。また新しいコラボレーションができるることを期待している。

(ソウ・モウ・トウ)

聖と俗、雨と楽器と歌と静寂、伝承と許可証と観光とお金、主と客、光と霧と闇、みんなと私。大いなる自然と物語を前に、私は誰で、何をするのか…遠く離れた東京の寺で『テラ』を上演した紆余曲折が思い出された。

(渡辺真帆)

この季節必ず降ると言われていた雨が降り続いていて、濡れた斜面をゆっくり上がっていき、雨宿りをしながらいろんな人と話をした。ずっと目指してきたテラジアの目的地にいることがただただ不思議で、疲れがじんわりあって、空気は少し肌寒かった。月の下で静かな音楽に包まれて、自分たちはずっとそうしていたような、永遠のような一瞬のような時間だった。

(坂田ゆかり)



記録のために撮影していたカメラのレンズを通して、複雑な感情が交錯した。言葉による指示はなくとも、皆、時間と歴史という長い距離を越えて、空間的な風景とつながろうとしているように見えた。雨に濡れそうになりながら、この古代のタイムカプセルの中に立ち、現代の電子機器に囲まれている自分。方向感覚を失い、翻弄されているような気分だった。しかし、やがて気づいた。雨は私を清めようとしているのかもしれない——文化の謙虚な奉仕者として、芸術を心に抱く者として。それは、私の中の芸術の核心を洗い流すようなもので、月に憧れるフクロウのように、私たちの希望がいつも簡単に届くとは限らないことを思い出させてくれた。



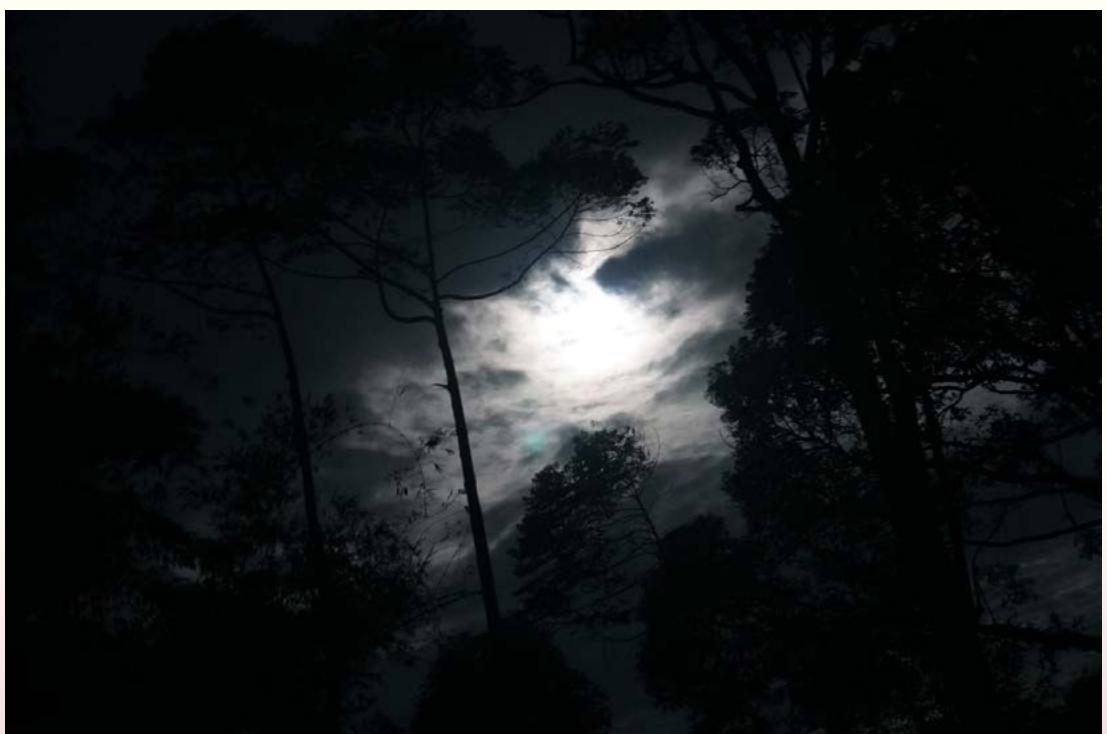
(ユスティアンシャ・ルスマナ)

グスン・パダンでの滞在中、私は、自国の悪夢の後に再び自分自身を見つけるための、静かな落ち着きを感じた。私たちの社会が置かれている非常に複雑な状況の中で、自分の立ち位置を考える時間を得た。さらに、自分の希望を再び見る機会でもあったのだ。

(ティラ・ミン)

グスン・パダンでのテラジアの活動は、単なる芸術活動ではなく、人間と自然、そして神との関係を意識させる活動だった。

(ラウェ・サマガハ)





グヌン・バダンでの儀式の経験は、そこにいた彼らの内にのみ存在するでしょう。ここでは、彼らがどういった時間を過ごしたのか、想像するほかありません。しかし、彼らの言葉によると、グヌン・バダンでの時間は、人同士や自然、神的な存在とのつながりを感じ、特別な体験であったことは確かです。テラジアというコミュニティ（集団）で、ひとところに集まり、日常生活とは少し異なった特別な行為をし、ともに時間を過ごす。このことを「儀式」と言い表すほかないでしょう。

隔離の時代（パンデミックの時代）から始まったテラジアというプロジェクトは、このグヌン・バダンでの儀式を経て、まさに隔離の時代の終わりを告げました。しかし、これまでに紡がれてきた様々なネットワーク、次々と生まれた作品、そして答えの出ない問いは続いていきます。テラジアは隔離の時代以後、新たな、別の、まだ見ぬ、次の旅に旅立つことでしょう。

テラジアの永遠の旅は、目に見えないつながりを信頼するようにと私たちを誘います。私たちはコレクティブとして、どのような社会に生きていようとも、その根底で共有している人間のコアを探求し続けます。深く分断された世界の中で、私たちは出会い、実験、内省、対話の場を創り続けています。こうした行動の積み重ねが、時間をかけて現実を変えていく可能性を秘めていると信じています。

(Sua TERASIA Episode 2 WEB サイトより)

『終わりと始まりの儀式』

2025年1月14日～15日

インドネシア／グヌン・バダン遺跡

発起人：ディンドン W.S.

音楽：ラウェ・サマガハ、ハディ・クスマヤディ、アグス・マウラナ

瞑想ファシリテーター：ズン・エイ・ビュー

登頂者：ファイサル・シャレザ、イクバル・エキ・ヌグラハ、エドワル・マウラナ、アディ、ルリイ・モレノ、ユスティアンシャ・ルスマナ、タシャ、スヘンディ、スラエマン、エド、デフィナ、ニザル、アイシャ、マルガレタ・マリサ、フェラ・ユリア、フェラ、リフカ、アウイン、滝口健、辻愛麻、渡辺真帆、稻継美保&ミリ、曾根千智、坂田ゆかり、中鉢夏輝、清池祥野、川口智子、森田百合花、戸田史子、横須賀智美、ティラ・ミン、ソウ・モウ・トウ



おわりに

「テラジア | 隔離の時代を旅する演劇」の前史から7年間を振り返り、改めて、この不思議な旅を続けてくることができたことに、驚きとありがたさが入り混じる思いを抱いています。

突如現れた未知のウイルスが人を媒介し、瞬く間に世界中に広がったCOVID-19は、第1波、第2波、第3波…と、新たな変異株が出現するたびに多くの死者と感染者を巻き込みながら、「人間、さあどうする？」と矢継ぎ早に対応を迫ってきました。日々の行動は制限され、経済活動は停滞を余儀なくされ、真偽の定まらない情報だけが目まぐるしく錯綜し、行き場のない不安とフラストレーションがあちこちで渦を巻く。その背後で、社会はいつしか民主的な判断とは真逆の方向に変化し続けていて、あろうことか、新しい戦争も始まりました。

テラジアの拠点とする地域は同じアジアといえども、ロックダウンの厳格さやアーティスト支援をはじめとする文化行政の考え方など、各國・各都市の対応はそれぞれ異なり、メンバーたちの置かれている状況には大きな不均衡がありました。だからこそ、離れた場所から連絡を取り合う情報交換は大切なプロセスでした。相手と自分が直面している現実から、そのとき障害となっていることは何かを伝え合います。

「絶対にできないことがあるならば諦めよう。」

「困難があったとしても、解決できる可能性がある。」

「今はできないけれど、きっといつかできる。機が熟すのを待とう。」

そのようなやりとりを通して、テラジアは友情を深めていきました。

Sua TERASIA Episode 2のラウンドテーブルの中で、「ネットワーキングと友情はどう違うのか？」という議論があったことは象徴的なことです。人々がつながって互いの利益を高め合うことがネットワーキングならば、他者の存在が自分を脅かす分断の時代にその価値を見出すことはできません。しかし、友情を動機としたコレクティブは、資本主義的な意味で大した利益を生み出すこともない代わりに、相手のために自分の経験や知識や技術を駆使してなんとかクリエイションを実現したいと願う、大きなエネルギーを人々の内側から引き出し、プロジェクトの推進力に変えることができます。そして、そこに作品が生まれ、観客が集い、否定しようのない文化的な営みが立ち現れます。

そうしてあっという間に時は過ぎ、2023年5月、世界保健機関（WHO）は、COVID-19に関する「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」の終了を宣言しました。コロナウイルスはもはや未知の脅威ではなく、地域的・季節的に繰り返されるエンデミックな感染症としてこの地球上に定着したのです。隔離の時代のあとにやってきた新しい時代は、ふたたび私たちに問いかけます。「人間、さあどうする？」と。

かく言う私も、テラジアの初期メンバーの1人として、「これからテラジアはどうするのですか？」と、よく質問を受けます。しかし、正直なところ、まだ次の展開は決まっていません。今、各地のアーティストたちは、劇場に戻ってきた観客のために、アートを必要とするコミュニティのために、また若き後進たちのために、それぞれ忙しい日常を過ごしています。そして、私たちの友情は今も密やかに続いている。私の個人的な予想では、これからは季節性の感染症のように、あるとき誰かが何かにインスペイバーされて声をかけ合い、WhatsAppやZoomで必要なときに対話し、飛行機に乗って会いに行き、協働制作や儀式をするなんてことが、パンデミックの頃よりも緩やかに、未永く繰り返されていくのではないかと思っています。実際はどうでしょうか。いつか答え合わせをしたいですね。

テラジア 坂田ゆかり



Sua TERASIA Episode 1 最終公演後、バンドンにて

謝辞

テラジアの歩みを支えてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

本プロジェクトの発足初期、2年間にわたり背中を押してくださった国際交流基金アジアセンターの皆さん、その後3年間にわたりご支援くださったアーツカウンシル東京の皆さんには、長期プロジェクトの活動の基盤を力強く支えていただきました。ほかにも、数多くの公演や展覧会への助成、会場や機材等の提供、アーティスト個人に対する活動助成、さらにはご寄付や投げ銭など、多様なかたちでのご支援に励まれ、テラジアは活動を継続することができました。インドネシアでの国際芸術祭「Sua TERASIA」は、ジャカルタ、バンドン、チアンジュールの皆さんとの温かな受け入れとご協力なしには実現し得ませんでした。高い専門性を持つ制作・技術チーム、地域からボランティアとして参加してくださった方々、そして観客としてテラジアの作品やワークショップを体験し、見届けてくださった多くの皆さんの力によって、文化と創造が交差する場が生まれたことに、深く感謝申し上げます。

資料 テラジアにまつわる作品・イベント一覧 2018-2025

2018

公演

フェスティバル/トーキョー18

まちなかパフォーマンスシリーズ

『テラ』

📍日本／東京

2018年11月14日～17日

西巣鴨 西方寺

作・演出：坂田ゆかり

出演：稻継美保

音楽：田中教順

ドラマトゥルク：渡辺真帆

衣裳：藤谷香子 (FAIFAI)

音響：福岡功訓、堀籠勇矢 (Flysound)

舞台監督：佐藤恵

舞台監督助手：石橋侑紀

英語翻訳：ジョン・タウンゼント

記録写真：松本和幸

記録映像：藤川琢史、宮澤響 (Alloposidae)

宣伝写真：加藤甫

宣伝美術 (メインビジュアル)：11piki

宣伝美術：植田正

制作：松宮俊文、荒川真由子 (フェスティバル/トーキョー)

インター：堂前晶子、戸倉紀乃、村上理衣奈

原案：三好十郎「詩劇『水仙と木魚』——少女の歌える」ほか

企画・主催：フェスティバル/トーキョー

協力：遠藤卓也 (未来の仏教ラボ)

特別協力：西巣鴨 西方寺

引用：吉岡実「僧侶」(1958 「僧侶：吉岡実詩集」)

ユリイカ、富岡多恵子「前書」「お前じやなくて奴だ」(1970 「厭芸術反古草紙」思潮社)

2019

公演

『テラ』 チュニジア3都市ツアー

📍チュニジア/チュニス、モナスタイル、サグアン

チュニス: 2019年12月10日

ISAD Institut Supérieur d'Arts

Dramatiques

モナスタイル: 2019年12月12日

Centre des Arts Dramatiques et Scéniques de Monastir

サグアン: 2019年12月14日

Centre des Arts Dramatiques et Scéniques de Zaghouen

演出: 坂田ゆかり

出演: 岩澤侑生子

音楽: 田中教順

ドラマトゥルク: 渡辺真帆

衣裳: 藤谷香子 (FAIFAI)

通訳: ハイサム・シーミ

舞台監督: バックサラン・ポンハーン、ティバ

ボーン・スントンジャモーン、タンラッタナラ

ム・チーブヌラット

プロジェクト操作: ナルモン・タマブルック

サー

メイク: タンラッタナラム・チーブヌラット

音響: ワサンチャイ・イムオット

照明: A-Plus Light & Sound (シティボン・サ

イウォンパンヤ、ナット、ブライト)

衣裳: オラタイ・ピクンガモンラット、ミセス・ベン

映像撮影: スバモーク・シラーラック (Mayim

Studio)

日本語字幕: 千徳美穂

Special Thanks to:

ティーラスツボット師 (サンガ・チャウォン博士) -

バーラート寺院住職、ティー・ラウイット・ジラ

ワッタノ師 - バーラート寺院、Monk Chat

みなさん、ワラボーン・ワスンタララート - ラ

チャマンガラビセック図書館 (チェンマイ) 館長、

ラチャマンガラビセック図書館 (チェンマイ) 警

備部、シティボン・サイウォンパンヤ (A-Plus

Light & Sound)、サハタムニックチョン財団と

イッティサック・レーイットボーンチャイ、セツ

コ・コーン (チェンマイ発北タイ日本語情報誌 CHAO

「ちゃ～お」、サイクラン・ジンダス、ソムバット・タバンヤ博士 (Peace Culture Foundation)

ノッバマス・シリチュンボン、カンダ・アーツ・

アンド・シアター・カンバニー、オラタイ・ビ

ケンガモンラット (レワディカーテン)、アリ・ド

クソン

監修: ブンチュアイ・シリント口師 (マハーチュラ

ロンコーン・ラージャヴィドゥヤラヤ大学)、ソムワ

ン・ゲオスフォン博士 (チェンマイ大学人文学部)

助成: 国際交流基金アジアセンター アジア・

市民交流助成

上映

『TERA テラ』 オンライン上映会+ア

フタートークセッション

📍オンライン

2020年10月30日

登壇者: 坂田ゆかり、稻継美保、田中教順、

渡辺真帆、藤谷香子(FAIFAI)
ナルモン・タマブルックサー、ソノコ・プロウ、
グラム・タム、グリット・レカクン、トーボン・
サメージャイ、ソムワン・ケスフォン
翻訳監修・通訳: プサディ・ナワウイチット
助成: 国際交流基金アジアセンター アジア・
市民交流助成

プレゼンテーション

『テラ 京都編』公開制作プレゼンテーション

日本／京都

2020年11月24日

京都芸術センター 制作室

登壇: 坂田ゆかり、渡辺真帆、稻継美保、田中教順

協力: 京都芸術センター

2021

プレゼンテーション

TPAM 2021: グループ・ミーティング 「国境をまたがずにアジアを旅する: 演劇プロジェクト『テラジア』の新たな国際共同創作」

日本／横浜、オンライン

2021年2月10日

BankART Temporary 3F ギャラリー／
Zoom

ホスト: 田中里奈、ナルモン・タマブルックサー、渡辺真帆、ミャンマー匿名アーティスト

公演

『テラ 京都編』

日本／京都

2021年3月26日～28日

臨済宗 興聖寺 涅槃堂

演出: 坂田ゆかり

出演: 稲継美保

音楽: 田中教順

ドラマトゥルク: 渡辺真帆

衣裳: 藤谷香子 (FAIFAI)

衣装協力: Phablic × Kazui

制作: 宮武亜季

写真記録: 北川啓太

映像記録: ON-EI (佐々木美佳、紫藤佑弥、黒井岬)

録音・整音: 紫藤佑弥
映像編集: 佐々木美佳
英語翻訳: ジョン・タウンゼント
字幕: 澤島さくら

企画・主催: 合同会社UPN
特別協力: 臨済宗 興聖寺
協力: 京都芸術センター制作支援事業
助成: 国際交流基金アジアセンター アジア・
市民交流助成

原案: 三好十郎「詩劇『水仙と木魚』——少女
の歌える—」(1957)、安部公房『カンガルー・
ノート』(1991)、臨済宗興聖寺公式YouTube
チャンネル「坐禅のチカラ 和尚のほっこり修
行TV」【朝の法話】第6回 大海をわたる～
はまかぜに乗って』(2020)
引用: 吉岡実「僧侶」(1958)、興聖寺経本「卻
迦羅神呪」、富岡多恵子「物語の明くる日」(1961)
参考: 山折哲雄監修「あなたの知らない栄西と
臨済宗」(2014)

テラジア オンラインウィーク2021

2021年11月19日～28日

主催: 合同会社UPN
助成: 国際交流基金アジアセンター アジア・
市民交流助成
特別協力: フェスティバル/トキヨー実行委
員会 (映像提供)

広報: 菅井新菜、遠藤未来子

広報デザイン: 三輪明日香 (Nicol Graphics)

ウェブサイト制作: 株式会社エボルニ

映像・字幕: 佐々木美佳、スマモーク・シラ

ラック (Mayim Studio)、リンタンナイン

翻訳: ジョン・タウンゼント、澤島さくら、梶

田唯、グラム・タム、ブーミヤットウェ

翻訳監修: 千徳美穂

通訳: 辻愛麻、福岡まどか

配信技術: 井上和彦 (株式会社ボール)

スペシャルサンクス: 岩澤侑生子

トーク

オープニング: 隔離の時代を旅するそ
れぞれの現在地

オンライン

2021年11月19日

登壇: 渡辺真帆、ナルモン・タマブルックサー

一、カミズ、グエン・ハイ・イエン

モデレーター: 田中里奈

音楽

往復書簡: テラとTERAの音楽をめ
ぐつて

オンライン

<https://qr.paps.jp/kgN74>

音楽: 田中教順、グリット・レカクン

公演映像

映像配信『テラ 京都編』

オンライン

配信期間: 2021年11月19日～12月26日

トーク

アーティストトーク (日本)

オンライン

開催日: 2021年11月21日

配信期間: 2021年11月22日～12月26日

登壇: 坂田ゆかり、稻継美保、田中教順、渡
辺真帆

映像

東京初演『テラ』のリハーサル映像

オンライン

配信期間: 2021年11月19日～12月26日

映像提供: フェスティバル/トキヨー実行委
員会

トーク

座談会 日本

オンライン

<https://youtu.be/XIZFS8jVi-c>

聞き手: 中本千晶

登壇: 坂田ゆかり、稻継美保、田中教順、渡
辺真帆

公演映像

公演配信『TERA タラ (テラ・テラ)』

オンライン

配信期間: 2021年11月19日～12月26日

トーク

アーティストトーク (タイ)

オンライン

開催日:2021年11月21日

配信期間:2021年11月22日~12月26日

登壇:ナルモン・タマブルックサー、ソノコ・
プロウ、グリット・レカケン

トーク

座談会 タイ

⌚ オンライン

<https://youtu.be/2DexD3hqVtI>

登壇:ナルモン・タマブルックサー、ソノコ・
プロウ、グラム・タム、グリット・レカケン、
トーボン・サメージャイ、スバモーク・シラー
ラック

トーク

『TERA Vietnam』作品構想プレゼンテーション

⌚ オンライン

<https://youtu.be/qKbbuoH4cJ4>

登壇:グエン・ハイ・イエン、リン・ヴァレリー・・ファム

映像

『Masking Death』

⌚ オンライン

制作期間:2021年10月~11月

公開開始:2021年11月27日

<https://youtu.be/dvSzjSD2p1A>

制作:カミズ、オンラインの匿名参加者たち

トーク

座談会 ミャンマー

⌚ オンライン

<https://youtu.be/g7K6-WckQow>

登壇:カミズ、ノラ、ラダナー、シグウェー

トーク

クロージング:旅の目的地—テラジアサミット2023 in インドネシアに向けて

⌚ オンライン

開催日:2021年11月28日

<https://youtu.be/SyTCkyjvF-M>

登壇:ディンドン W.S.、グエン・ハイ・イエン、ナルモン・タマブルックサー、渡辺真帆

モデレーター:田中里奈

2022

展覧会

『Masking/Unmasking Death

死をマスクする／仮面を剥がす』

⌚ 日本／東京

2022年5月1日~10日

東京藝術大学大学美術館 陳列館

主催:東京藝術大学大学院 国際芸術創造研

究科 アートプロデュース専攻(GA)毛利嘉孝研

究室、東京藝術大学グローバルサポートセン

ター(東京藝大AAI)、合同会社UPN

助成:公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京【スタートアップ助成】、公

益財団法人 花王芸術・科学財団

キュレーター:居原田遙

アーティスト:カミズ

プロデューサー:坂田ゆかり、渡辺真帆

資料制作・写真及び作品資料提供: Bullet

Holes Country(北角裕樹、アウン・トゥン・リン)

展示・設営:加藤康司、川田淳、寺田鵬弘、

志村誠、ニーナ・ボグシェフスカヤ

展示物品(Tree)制作:林周一、河内哲二郎

広報:遠藤未来子

翻訳:ティン・ティントゥン、梶田唯、キャサリ

ン・ハリントン、渡辺真帆

会場運営:東彩織、鈴木大翔、INHO

ロゴ・フライヤー・ポスター・デザイン:中本那

由子

記録写真:富田了平

ウェブサイト制作:株式会社エボルニ

関連コンテンツ

・3Dアーカイブ

<https://dt.geidai.ac.jp/?p=1309>

アーカイブ制作協力:東京藝大アートDX

・特別映像

サイン・ワイン 特別演奏

『 カンボジアの多生の縁

Kyonthalay Bonbwe』

<https://youtu.be/fFa81kLvNts>

演奏:田中教順

録音:三浦実穂、西原尚

映像:富田了平

・居原田遙、坂田ゆかり、渡辺真帆によるアフタートーク

<https://youtu.be/iNm5ajCD0js>

登壇:居原田遙、坂田ゆかり、渡辺真帆

関連イベント

・カミズによるワークショップ

2022年5月1日、5日、10日

東京藝術大学大学美術館 陳列館

出演:カミズ

シンポジウム

2022年5月6日

Zoom配信

登壇:中西嘉宏、篠田ミル、居原田遙

映像

音楽セッション+楽器紹介

⌚ オンライン

収録日:2022年9月8日

https://youtu.be/D2_pGcDcZz4

出演:グリット・レカケン、ラウェ・サマガハ、田中教順

映像

『竹中生誕』

⌚ オンライン

<https://youtu.be/94oFGs-NFdM>

演出:坂田ゆかり

出演:ディンドン W.S.

ナルモン・タマブルックサー

Fauzi、Ovi、Jawir、Rayhan、Ridho、

Sahri、Alfi、Sahsi、Kharis、Abdii、Baban

Sopandi、Sari Mutia Kasih、Rizki

Guciano、Nur Widia Loka、Alif Akbar

Al-fata、Ike Dirga Santosa、Diah

Lestari、Aime、Ale、ユスティアンシャ・ル

スマナ、スギヤンティ・アリアニ、ズン・エイ・

ビュー、渡辺真帆

撮影:富田了平

音楽:田中教順

特別協力:Hutan Kota Sangga Buana

公演

『 カンボジアの多生の縁

Kyonthalay Bonbwe』

⌚ ミャンマー/ヤンゴン

ワークショップ:2022年10月1日 Authentique Art Gallery 上演:2022年10月20日 ゲート・インスティトゥート・ミャンマー 講堂	https://terasia.net/event/ onlineweek2022/indonesia_ research/ 参加メンバー: [インドネシア] ディンドン W.S. 、テアター・ クブルのみなさん、ラウェ・サマガハ、ユス ティアンシャ・ルスマナ、スギヤンティ・アリ アニ [日本] 渡辺真帆、坂田ゆかり、田中教順、富 田了平 (写真記録) [タイ] ナルモン・タマブルックサー、グリッ ト・レカクン [ミャンマー] ズン・エイ・ビュー	https://www.flickr.com/ photos/192693707@N07/ 発案・コーディネーター:ナルモン・タマブル ックサー フォトグラファー:ゾーンタウイ・トゥムバセス 師、スバモーク・シラーラック 俳優:ソノコ・プロウ、グラム・タム 音楽:グリット・レカクン、トーボン・サメージャイ
テラジア オンラインウィーク2022+ オンライン 2022年11月4日~13日 主催:合同会社UPN 助成:公益財団法人東京都歴史文化財団 アー ツカウンシル東京	公演映像 映像配信『  タマブルックサー』 オンライン 配信期間:2022年11月4日~ 11月14日	トーク 『TERA Indonesia』トーク・イン・ プログレス オンライン https://youtu.be/xXIAV75IK7A 登壇:ディンドン W.S.
	トーク 『Tangerine Womb』作品構想ブレ ゼンテーション オンライン https://youtu.be/fj1xqgZkc30 登壇:グエン・ハイ・イエン、渡辺真帆 リサーチに対する助成:アジアン・カルチュラ ル・カウンシル (ACC)	音楽 音楽セッション: https://youtu.be/D2_pGcDcZz4 楽器紹介: https://youtu.be/Fiy5OWIB5qY https://youtu.be/V_f9Wg7zU9k https://youtu.be/oe2MZoRwDAO https://youtu.be/nDaLpJQaox4 https://youtu.be/k-2gEUP9h6U 出演:グリット・レカクン、ラウェ・サマガハ、 田中教順
	トーク オーブニング:トランジット 旅の軌跡 オンライン https://youtu.be/YtxxgLst7Gw 登壇:渡辺真帆、ナルモン・タマブルックサ ー、ズン・エイ・ビュー、グエン・ハイ・イエ ン、ディンドン W.S.	オンラインイベント TERASIA Onsite 2022 in Tokyo 日本/東京 2022年11月8日~11月13日 神保町 PARA 主催:合同会社UPN 共催:PARA 助成:公益財団法人東京都歴史文化財団 アー ツカウンシル東京
公演映像/展示映像 これまでのテラジア:タイ・日本・ミ ャンマー オンライン 配信期間:2022年11月4日~11月14日	音楽 楽曲『Circle of Karma』 オンライン https://qr.paps.jp/sTo12 作曲・演奏:グリット・レカクン、トーボン・サ メージャイ	写真 デジタル写真展『Reflection and Reinterpretation of TERA テラジア』 オンライン ・トーク「テラジアって何?」 11月8日 登壇:坂田ゆかり、渡辺真帆 (Zoom)、岸井 大輔
レポート インドネシア滞在リサーチ オンライン		

- ・トーク「インドネシア 滞在報告会」
11月9日
登壇:坂田ゆかり、渡辺真帆 (Zoom)、岸井大輔
- ・『*ဤည်းဘိုးရာများ၏ရှေ့ဆိပ်*』上映会+アフタートーク
11月11日
登壇:居原田遙 (Zoom)、岸井大輔
- ・『テラ』上映会+アフタートーク
11月12日
登壇:坂田ゆかり、稻継美保、岸井大輔
- 特別協力(映像提供):NPO法人アートネットワーク・ジャパン
- ・『TERA အခြေ (テラ・テラ)』上映会+アフタートーク
11月12日
登壇:千徳美穂、パンヤネラミッティー・チャニダー、岸井大輔
- ・「ドラマトゥルク」のベトナム滞在報告会
11月12日
登壇:渡辺真帆 (Zoom)、岸井大輔
- ・『テラ 京都編』上映会
11月13日
登壇:坂田ゆかり、稻継美保、岸井大輔

- ・オンサイトイベント
TERASIA Onsite 2022 in Chiang Mai
📍 タイ／チェンマイ
2022年11月30日～12月4日
・『テラ』上映
11月30日
・『テラ 京都編』上映
12月1日
・『テラ・テラ』上映
12月2日～4日
・ディスカッション:「大乗仏教から見た死:チベットと日本」
12月2日

- ・コンテンポラリー・スピリチュアル・ダンス・舞踏」ワークショップ
12月3日
講師:ソノコ・プロウ
・ドラマ音楽のデザインワークショップ
12月3日
講師:グリット・レカクン、トーボン・サメーシャイ
・『テラ・テラ』の音楽制作
12月4日
出演:グリット・レカクン、トーボン・サメーシャイ
・ディスカッション「上座部仏教から見た死」
12月4日
登壇:田辺繁治、ティーラウイット・ジラワッタノ師 (パーラート寺院)
・同時開催「ドラマ『テラ・テラ』にインスピレーションを得た写真展」
フォトグラファー:スパモーク・シラーラック、ゾーンタウイ・トゥムバセス師

主催:チェンマイ大学マスコミュニケーション

学部、合同会社UPN

プロデューサー:ナルモン・タマブルックサー、テラジア タイ

2023

テラジア オンラインウィーク2022+
オンライン

・オンサイトイベント

TERASIA Onsite in Jakarta

📍 インドネシア／ジャカルタ
2023年1月20日～21日
Psbb jakarta barat,Indjara,コムニタス・ウタン・カユ - Teater, DLDC Studio
・上演『Funeral Gift for Aminah Ghost』
1月20日

パフォーマンス:ユスティアンシャ・ルスマナ、スギヤンティ・アリアニ

・上演『Ritus Operasi Bocor』
1月21日

パフォーマンス:テアトル・クブル
・バネルディスカッション「Theatre Traveling: Border / Bonderies」
1月20日

登壇:アリアンシャ・チャニアゴ、ティタ・サリナ
モデレーター:セリラ・ディアン
・バネルディスカッション「Theatre, Death and Ritual」
1月21日

登壇:トゥティク・クスバルディアティ博士、イルワン・アフメット、ディンドン W.S.

モデレーター:アクバル・ユンニ
・展示「テラジアプロジェクト」
1月20日～21日

・上演『テラ』『テラ 京都編』『TERA အခြေ (テラ・テラ)』『*ဤည်းဘိုးရာများ၏ရှေ့ဆိပ်*』
1月20日～21日

主催:テラジア インドネシアチーム、合同会社UPN

助成:公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

2024

Sua TERASIA Episode1

⌚ インドネシア／ジャカルタ、バンドン

2024年1月12日～20日

主催:スアテラジア実行委員会、合同会社UPN

制作:カタリスト・クリエイティブ・クラブ

協力:テアトル・クブル、コムニタス・ウタン・カユ、クダイ・テンポ、スラサール・スナルヨ・アート・スペース、インドネシア芸術文化大学 (ISBI) バンドン校

助成:公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、公益財団法人 業務スーパー・ジャバンドリーム財団、公益財団法人 松浦芸術文化財団、エブソン・インドネシア

認定:公益社団法人 企業メセナ協議会

翻訳:ニスス・アンダルヌスワリ、ディヤ・アユ・クスマワルダニ、アリフ・ラハディアン、ケジア・アライア、横須賀智美

PR:クルニア・ヤウミル・ファジャル、ウタマ・デキ、レザ・クツ

キービジュアル:レザ・クツ&クルニア

ウェブデザイン:平沢真生

記録:山畠俊樹、ショビブル・ローマン・ギフアリ

ライブ配信:エファン・ブトラ、ムハマッド・シヤロファイン、リファルディ・ムイザディン ホスピタリティ:アニンディタ・ハナディヤス、アリフィア・ブトリイ・ブラメスワリ

プロダクション・コーディネーター:戸田史子

プロダクション・チーム<ジャカルタ>

プロダクション・マネージメント:ミタエ、フェラ・ユリア、カタリサ

ステージ・マネージメント:マルガレータ・マリサ、フェラ・ユリア、イスカンダル・ムダ

運営:リファルディ・ムイザディン、イブヌ・スティアワン、イルワン・サンブルナ、クルニア・ディ・サンディ、アミラ・フスナ・ブディ・ハンダヤニ

音響エンジニア・オペレーター:スンタヌ、ムハマッド・フィックリ・ジュニオ、

照明デザイナー・オペレーター:ファジャル・オクト、イルザヤ、アミン

プロダクション・チーム<バンドン>

ローカル・コーディネーター:トニイ・ブロアード、ファッド・ジャウハリ

ステージ・マネージメント:ワイル・イシャツ

テクニカル・スタッフ(タイ):バンチャナサック・ニティウエチャクン、オーガスト・セルケ

テクニカル・チーム:ムハミル、アジ・スタ、

マルシャル(アチャル)、ノファル、ジョン、ヒル

マン(ウタイ)

音響エンジニア・オペレーター:ラディ・タジユル・アリフィン、ムハマッド・アンシャリ・シヤフェイ、ファリス・マレタ・スハンディ、ムハ

マッド・イマム・ファデイラ

アデ・ヌルジャマン、ハビブ・シャイフル・ア

ンワル

照明デザイン・オペレーション:エム・ザムザム・ムバロック、アディッ、マヌック、リスキイ・トト、ジャファル、アグス、デデ、アルル

運営:ジュハリ・ウスマン・アリ、サリラ・アヤ

テュシフィア、センディ

ホスピタリティ:ファニア

メイク / 会場誘導:フェガ・ムティア、アンゲ

ル・ジャウハリ、ウマ

スアテラジア実行委員会:渡辺真帆、坂田ゆ

かり、ユスティアンシャ・ルスマナ、スギヤン

ティ・アリアニ

テラジア・コレクティブからの参加アーティス

ト:ディンドン W.S.、スギヤンティ・アリア

ニ・ラウェ・サマガハ、ユスティアンシャ・ル

スマナ、ナルモン・タマブルックサー、ソノ

コ・ブロウ、グラム・タム、グリット・レカク

ン、トーボン・サメージャイ、坂田ゆかり、渡

辺真帆

映像上映

『テラ』上映

⌚ ジャカルタ、バンドン

ジャカルタ:2024年1月13日

コムニタス・ウタン・カユ・Teater

バンドン:2024年1月17日

ISBI バンドン校・Studio Teater

演出:坂田ゆかり

出演:稻継美保

音楽:田中教順

ドラマトゥルク:渡辺真帆

公演

『TERA テラ (テラ・テラ)』

⌚ バンドン

2024年1月19日～20日

スラサール・スナルヨ・アートスペース - Bale Handap + Amphitheater

演出:ナルモン・タマブルックサー

出演:ソノコ・ブロウ、グラム・タム

音楽:グリット・レカクン、トーボン・サメージャイ

ドラマトゥルク:ソムワン・ゲオスフォン博士、グラム・タム

テクニカルスタッフ:バンチャナサック・ニティウエチャクン

ステージマネジメント:オーガスト・セルケ

翻訳:ディア・アユ・クスマワルダニ

英語編集:オーガスト・セルケ

公演

『テラ ジャカルタ編／バンドン編』

⌚ ジャカルタ、バンドン

ジャカルタ:

2024年1月12日

コムニタス・ウタン・カユ - Kedai Tempo

2024年1月13日

テアトル・クブル - Studio

バンドン:

2024年1月17日

インドネシア芸術文化大学 (ISBI) バンドン校 - Studio Teater

2024年1月19日

スラサール・スナルヨ・アートスペース - Kopi

演出:坂田ゆかり

出演:スギヤンティ・アリアニ

音楽:ラウェ・サマガハ

ドラマトゥルク:渡辺真帆

特別出演:靈河太樹

通訳・翻訳:横須賀智美、ディア・アユ・クスマワルダニ

翻訳監修:アンドリ・ヌル・ラティフ

ワークショップ

『死の体験旅行』

⌚ ジャカルタ、バンドン

ジャカルタ:2024年1月14日

コムニタス・ウタン・カユ - Teater

バンドン:2024年1月18日

ISBI バンドン校 - Ruang Jaya

Pradangga

講師: 霊河太樹

通訳: 横須賀智美

翻訳監修: アンドリ・ヌル・ラティフ

…公演

上演『儀式のタベ』

📍 ジャカルタ

2024年1月14日

コムニタス・ウタン・カユ - Teater

ホスト: ディンドン W.S.

ミュージシャン: グリット・レカクン、トーボン・サメージャイ、ラウェ・サマガハほか

パフォーマー: ソノコ・プロウ、テアトル・クブルほか

…展示

『What is TERASIA?』

📍 ジャカルタ、バンドン

ジャカルタ: 2024年1月12日~14日

コムニタス・ウタン・カユ - Kedai Tempo

バンドン: 2024年1月17日

インドネシア芸術文化大学 (ISBI) バンドン校 - Studio Teater

…トーク

ラウンドテーブル1: 遠隔共同とサイトスペシフィックなアート実践

📍 ジャカルタ

2024年1月13日

コムニタス・ウタン・カユ - Teater

<https://youtu.be/vYTc-LcQ0bs>

登壇: 渡辺真帆、ナルモン・タマブルックサード、イルワン・アーメット

モデレーター: ユスティアンシャ・ルスマナ

…トーク

ラウンドテーブル2: ポスト・パンデミックの芸術とトランスナショナルな工

コシステム

📍 ジャカルタ

2024年1月14日

コムニタス・ウタン・カユ - Teater

<https://youtu.be/Yo-R2unA4MQ>

登壇: 長島確、ユディ・アフマド・タジュディン、ヨラ・ユルフィアンティ

モデレーター: 渡辺真帆

…トーク

ラウンドテーブル3: スアテラジアのためのオープンディスカッション

📍 バンドン

2024年1月17日

ISBI バンドン校 - Studio Teater

<https://youtu.be/4In60aJkQ8o>

登壇: レトノ・ドウイマルワティ博士、ファスル・アンショリ、長島確

モデレーター: ユスティアンシャ・ルスマナ

2025

Sua TERASIA Episode 2

📍 インドネシア/チャンジュール

2025年1月10日~19日

主催: スアテラジア実行委員会

助成: 公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会、

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカ

ウンシル東京

認定: 公益社団法人 企業メセナ協議会

特別協力 (特別協賛): ブミ・アグン・チキダン、キロメータル・スンビランリマ・コビ、チアン

ジュール・創造経済向上委員会、ロカットマラ

財団、ンガウィタン・ルアン・テュンブ、メデイア・インフォ・チアンジュール、アーツカウ

ンシル チアンジュール (チアンジュール芸術評

議会)、チアンジュール・クリエイティブ・セン

ター、文化観光局長、合同会社UPN

チアンジュールプログラム代表: ファイサル・シャレザ

秘書&ライセンス: エドワル・マウラナ

イベントコーディネーター: イクバル・エキ・ヌグラハ

美術品取り扱い (アート・ハンドラー): ウィディ NRS

アシスタント: ファティル&アミン

現地コーディネート: アディ、ラマダン・アブデュル・ハキム、ファジャル・ラフマット

デザイン/PR: ルットフィ

ウェブデザイン: 平沢真生

記録: ユスティアンシャ・ルスマナ、レラワン・ニザル、イブヌ・ウレ、フェラ、エド、ジョハ

リ、デフィナ

通訳: ルリイ・モレノ、マルガレタ・マリサ、横須賀智美、アイシャ

プロダクション・マネージメント: 戸田史子、タシャ、フェラ・ユリア

スアテラジア実行委員会: 渡辺真帆、坂田ゆかり、ユスティアンシャ・ルスマナ、スギヤンティ・アリアニ

テラジア・コレクティブからの参加アーティスト: ディンドン W.S.、スギヤンティ・アリアニ、ラウェ・サマガハ、ユスティアンシャ・ルスマナ、ズン・エイ・ビュー、ティラ・ミン・ソウ・モウ・トゥ、カミズ、稻継美保、坂田ゆかり、渡辺真帆

…上演

『Death is Something Visual』

2025年1月11日

Kilometer 95 Kopi

イニシエーター (発起人): スギヤンティ・アリアニ

ドラマツルギー: アクバル・ユムニ

コラボレーション: トニイ・プロア、フィッキイ・モノ、D.ブルキニ、モ・ワイル

芸術チーム: アジ・サンニアジ、イパン、ジャ・ファル、ロフマット

協力: コレクティブ・ラブ、ラブ・テュブウ

…ワークショップ

『シアター・クリエイター・ワークショップ - 歴史をつくる3日間の特別な旅』

2025年1月11日~13日

Dewan Kesenian Cianjur

ファシリテーター: ディンドン W.S.

コーディネーター: ファイサル・シャレザ

Special Thanks to: Museum Bumi Ageung Cikidang (ラシュマット・ファジャール)、SMAN 1 WARUNGKONDANG (イ・カバ・エキ・ヌグラハ)

…シアター・プロジェクト

『シアターM』

2025年1月11日~18日

Cianjur Creative Center, Kilometer 95 Kopi

シアターM ホスト: 稲継美保&ミリ

創作のパートナー:曾根千智	ピュー、ティラ・ミン
・ワークショップ	ファシリテーター:ユスティアンシャ・ルスマナ
『Kites for Gaza』	トーク
ホスト:M	ラウンドテーブル2:儀式、信仰、ス
・ワークショップ	ピリチュアリティと芸術
『Rajut Together』	2025年1月16日
アーティスト:愛麻	Cianjur Creative Center
・ワークショップ	登壇:ラウェ・サマガハ、ズン・エイ・ピュー、
『流しそうめんパーティー』	スヘンディ
アーティスト:中鉢夏樹	ファシリテーター:渡辺真帆
・ディスカッション	通訳:マルガレタ・マリサ
『パレスチナについて話そう』	トーク
ホスト:M	ラウンドテーブル3:混ざり合う、「ネ
・ワークショップ	アンガン・バトゥール」(友を探す)
『竹から楽器をつくる』	2025年1月17日
アーティスト:ラウェ・サマガハ、稻継美保	Cianjur Creative Center
・上演	ファシリテーター:ファイサル・シャレザ
『竹の音:歌:歌:歌:轍』	通訳:アイシャ
2025年1月17日~18日	メンバー:ラウェ・サマガハ、イクバル・エキ・
Cianjur Creative Center (2F)	スグラハ、エドワル・マウラナ、ウイディNRS、
プロデューサー:ズン・エイ・ピュー	ファデイル&アミン、アイシャ、ユスティアン
演出:ティラ・ミン	シャ・ルスマナ、マルガレタ・マリサ、ハディ、
出演:ソウ・モウ・トウ、リフカ	スラエマン、エド、ニザル、フェラ、坂田ゆか
・展示	り、渡辺真帆、戸田史子
『マスクする/仮面を剥がす:あいだの旅』	儀式
2025年1月16日~19日	『終わりと始まりの儀式』
Cianjur Creative Center	2025年1月14日~15日
キュレーター:居原田遙	グヌン・バダン遺跡
アーティスト:カミズ	発起人:ディンドン W.S.
・展示	音楽:ラウェ・サマガハ、ハディ・クスマヤデ
テラアジア展	ィ、アグス・マウラナ
2025年1月10日~19日	瞑想ファシリテーター:ズン・エイ・ピュー
Kilometer 95 Kopi	登頂者:ファイサル・シャレザ、イクバル・エ
2025年1月11日~19日	キ・スグラハ、エドワル・マウラナ、アディ、
Cianjur Creative Center	ルリイ・モレノ、ユスティアンシャ・ルスマナ、
・トーク	タシャ、スヘンディ、スラエマン、エド、デフ
ラウンドテーブル1:テラ/アジアにおけるトランスナショナルな協働創作とその未来	ィナ、ニザル、アイシャ、マルガレタ・マリサ、
2025年1月11日	フェラ・ユリア、フェラ、リフカ、アウイン、滝
Cianjur Creative Center	口健、辻愛麻、渡辺真帆、稻継美保&ミリ、
登壇:ディンドンW.S.、滝口健、ズン・エイ・	曾根千智、坂田ゆかり、中鉢夏輝、清池祥野、
	川口智子、森田百合花、戸田史子、横須賀智
	美、ティラ・ミン、ソウ・モウ・トウ

テラジア | 隔離の時代を旅する演劇 変異の記録 2018-2015

編著: 東彩織

デザイン: 中本那由子

英語翻訳: 辻愛麻

監修: 坂田ゆかり、渡辺真帆

編集協力: 宮武亜季、藤末萌

印刷・製本: 株式会社グラフィック

写真:

[テラ (2018)] 加藤甫、松本和幸

[TERA 開幕 (2020)] スバモーク・シラーラック

[テラ 京都編 (2021)] 北川啓太

[「テラ・テラ」にインスピレーションを得た写真展 (2022)] ソーンタウイ・トゥムバセス師、スバモーク・シラーラック

[Masking/Unmasking Death 死をマスクする／仮面を剥がす (2022)] 【インドネシアリサーチ (2022)] 富田了平

[ダヌン:カ:ダヌン: 載 (2022)] コー・トゥン・リン・モー

[ランソンリサーチ (2022)] 山畠俊樹

[Funeral Gift for Aminah Ghost (2023)] セケティ・テウェル

[Sua TERASIA Episode 1 (2024)] 山畠俊樹、ショビブル・ローマン・ギファリ

[Sua TERASIA Episode 2 (2025)] ユスティアンシャ・ルスマナ、レラワン、ニザル、イブヌ・ウレ、フェラ、エド、

ジョハリ、デフィナ、曾根千智 (テアターM)

and テラジアに関わる様々な人々

テラジアロゴデザイン: 三輪明日香 (Nicoli Graphics)

助成: 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京



【発行・お問い合わせ】

初版発行: 2025年6月30日

第2版発行: 2025年12月14日

発行: 合同会社UPN

〒131-0033 東京都墨田区向島5-31-5-501

<https://upn-jp.com/>

テラジア | 隔離の時代を旅する演劇

<https://terasia.net/>



©TERASIA、2025

All rights reserved.